

西域聞見錄同シク、ヤルケンド、ノ事ヲ記シテ曰ク其地有
 河産玉石子大者如盤如斗少者如拳如粟有重三四百觔者
 各色不同如雪之白翠之青蠟之黃丹之赤墨之黑者皆上品
 一種羊脂朱斑一種碧如波斯菜而金片透濕者尤難得河底
 大小石錯落平舖玉子雜生其間採之之法遠岸官一員守之
 近河岸營官一員守之派熟練回子或三十人一行或二十人
 一行截河並肩赤脚踏石而步遇有玉子回子即脚踏知之鞠
 躬拾起岸上兵擊鑼一捧官即過硃一點回子出水按點索其
 石子去葉爾羌二百三十里有山曰米爾台塔班遍山皆玉五
 色不同然石夾玉玉夾石欲求純玉無瑕大至千萬觔者則在
 絕高峻峯之上人不能到土產犛牛慣於登陟回子携具乘牛
 攀援鎚鑿任其自落而收取焉俗謂之療子石ト

マレコボロノ紀行ヤルケンド、チ、カルカマ、ト稱ス其記ス
 所甚々簡略ニシテ始メ此地方ノ蒙古大汗ニ屬シ、マホ
 メツト及子ストリ兩宗旨ノ並ヒ行ハル、事ヲ言ヒ後凡
 ツ必用ナル物ハ皆此處ニ於テ求ムルヲ得ヘシ住民技藝
 ニ精ハシ然レモ瘰癧病ヲ患ル者多シ此ハ飲用ノ水ニ因ル
 ト云フ等ノ事ヲ傳フルニ過キス其後千六百三年ホルト
 ガル人オモス、ト云フ者カブル、ヨリ發シ、バダクシヤン、チ
 經テ此地ニ至ル其紀行ノ大略ニ曰ク、ヒヤルカンド、ハゴ
 ス、ノ稱カシガル、ノ一大都府ニシテ四方ヨリ商賈種々ノ
 貨物ヲ運輸スル所ナリ即チ余モ亦インド、ヨリ發セシ商
 隊ニ伴ヒ來リ外ニ、メツク參詣ヨリ歸ル土人ノ夥伴トナ
 リシ者亦多カリシカ中ニ、カシガル王モハメツト汗ノ妹

アセハン、アリ其保護ニ依リ、ヤルケンド、ニ於テ殊遇ヲ受
ケルヲ得タリ時ニ前商隊解散シテ新ニ、ハタイ漢土行ノ
商隊組織始マレリ右商隊支配役ノ任ハ通例大金ヲ出シ
テ、ヤルケンド王ヨリ買フモノトス其ノ之ヲ買ヒシ者ハ
商隊ノ全權ヲ有スルヲ猶王ノ如シ凡ソ此ノ如キ商隊ヲ
組織スルハ凡ソ一年ヲ費ス且此ハ毎年出ツルニ非ス唯
漢土ノ之ヲ許ス時ニ限ルト
斯クテ、ヤルケンド、ニ於テ商隊支配役ノ任モ漸ク定マル
是ニ於テ、ゴエス、ヤルケンド王ニ時計及眼鏡等ヲ獻シ漢
土ニ赴クヲ秘シ、チ、アリス旅行ノ免許ヲ乞フテ之ヲ得
十頭ノ馬ヲ買ヒ千六百四年十一月ニ商隊ト與ニ、ヤルケ
ンド、ヲ發シ、ア、ク、ウ、ク、ウ、チヤ、ユルツース、トルフワン、ハ

サルイン

ミ、チ經テ漢土ニ近ツク途中沙州ニ於テ病死セシト云フ
ヤルケンド、ノ漢城ハ土人ノ本城ヲ距ル七八町濠ヲ掘リ土
壁ヲ廻ラシ城門ヲ兩方ニ建テ守備稍固シ參贊大臣此ニ駐
シテ天山南路ノ八大城ヲ管轄ス其率ユル所ノ兵ハ凡ソ五
千外ニ雜商職人下僕ヲ并セテ五千内外ノ住民アリ城内監
察甚々嚴ニシテ夜分ハ清國人ヲ除クノ外其内ニ入り或ハ
止宿スルヲ得ス
ヤルケンド、ノ直轄ニ屬スル諸邑中哈拉噶里克古可牙爾、契
潘、三珠ヲ以テ稍大ナルモノトス
ヤルケンド、ノ西南葱嶺山中ニ、サルイグル或ハ、マシ、ク
ガン、ト稱スル地方アリ其住民一部落ヲナス部衆多クハ、マ
ツシク、ノ、アル、ト、ト混セシモノニテ人戸ヲ總計八千内外

ト算ハ羊毛、硝石、硫磺、銅、鉛等ノ物産ヲ以テ諸方ト交易ス
 サルイクル或ハ、タシルルガシ、ハ始メ清國ニ歸服セシト
 雖用後數、コーカン侵暴ノ禍ヲ蒙リ遂ニ自ラ酋長ヲ撰ミ、バダ
 クシヤン及ワシカン諸國ト同盟シテ獨立スルニ至ル然ルニ
 千八百六十年ノ頃ニハ復メ清國ニ服屬シテ其保護ヲ仰キ
 年々多少ノ硝石ヲ貢納セシト見ヘタリ其後ノ事詳ナラス
 和蘭和蘭干國トハ本ト地方ノ總稱ニシテ其都城ハ、イリチ、ト稱
 ス、ヤルケント、ノ東百里許ニ在リ土壁ヲ環ラシテ城郭ヲ構
 へ其中ニ平屋密接シテ路甚タ狹ク市場繁鬧ナルハ他ノ中
 アワヤ諸城ト同シ又其近傍ニ漢城アリ別ニ一區ノ市街ヲ
 成ス
 ホタシ、ハ西南山ヲ負ヒ東北戈壁沙漠ニ接ス其沙漠及山麓

ノ間沃野平曠就中ホマン河邊ノ土地ハ一面肥美ノ田野ニ
 シテ土民一般稼穡ヲ勤メ生計ニ富ムノ稱アリ女子亦美ヲ
 以テ著ハレ多クハ養蠶及紡績ヲ業トス
 此地方山、藪多ク蠶亦善ク育シ各地紡績ノ業大ニ行ハル而
 シテ其織物ハ質緻密ニシテ聲價稍高シ山野亦獸獵ニ富ム
 故ニ、ホマン、ノ名物ハ古ヨリ美女麝香及織物ヲ以テ稱ス金
 玉ノ産亦却テ、ヤルケント、ニ勝ルト云フ
 ホマン管内ニ左ノ六城アリ、イリチ或ハ、ホマン城凡ソ六
 哈拉噶什凡ソ三玉隴哈什凡ソ二齊喇凡ソ二克里雅凡ソ四
 ヤスイ凡ソ二キシラ凡ソ二
 クリヤ、ヨリ一路東南ニ崑崙山ヲ越ヘテ西藏ニ通ス其路ニ
 當リ、ホマン城ヨリ凡ソ七十里許ノ距離ニ伊瑪木拉ト稱ス

ル村アリ、シユンカル、ツチワシラアマン、ノ時其將兵ヲ率
 非テ此ヨリ西藏ニ入リシト云フ
 ムルクロフト、ノ紀行ニ千八百四十年代ウノ見聞録ニシテ
 セン、モノ於テ出版ホマン邊ハ沙地多シト雖モ水饒カニシ
 テ善ク物ヲ生ス住民一般容貌秀美ニシテ女子ハ專ラ蠶
 及紡織ヲ以テ事トシ復タ西藏ノ如ク戶外ノ作業ニ任セ
 ス耕作及商賣ニ至テハ男子ノ業トス田野ニハ多ク大小
 麥及黍ヲ種ヘ菜園ニハ豆、胡蘿蔔、甜瓜ヲ種ユ每園果木繁
 茂シ石榴、杏、桃、梨、林檎、葡萄等ノ收穫殊ニ多シ家畜ハ馬ヲ
 以テ名産トス其馬小ナリト雖モ種類大ニ良シ山ニ翠野
 ニ牛馬ヲ牧シ亦多ク豐尾ノ羊ヲ飼フ其毛織細然レモ一
 年ニ刈ルテ二回ナルヲ以テ稍短シ此地方種々ノ野獸多

シ其駱駝ハ二峯ノ種類ニシテ栗毛多シ其長ク高ク行ク
 一甚メ速カナリ土人之ヲ獵シテ其肉ヲ食ヒ其毛ヲ用ヒ
 テ一種ノ布ヲ織ル野羊及鹿ノ類群ヲ成ヌ又麝香ヲ以テ
 テ舊來ノ名産トス熊、豹、狼、及孤兔等ノ小獸至テ多シ
 カラワシノハシ高隊支モハメツトニエミン、ノ報告書中
 ニイギド領ノ、委任ヲ受ケテ役所見テ出シタルモノ六十二年
 ホマシ、ノ南ニ方リシ、カラコルム山及ヒルエシ山崑崙山ノ
 谷間、廣キ石原ヲナシ両山ヨリ出ル數溪水之ニ注ヒテ小
 樹叢生ス此谷間ニ多少ノ金礦アリ其クシ、ヤ、ノ方ニ當リ
 シ、アイチザ、ト稱スル礦山ニハ年中六月ノ間工夫一千
 人常ニ其工業ニ従事ス右ノ工夫等毎年清國ニ一セル、ツ
 ハノ稅ヲ納ムトノ事アリ其他ノ記スル所ハ略前説ト同

シ
リツタル此地方ニ養蠶ノ始マリシヲ記シテ曰ク漢土
ノ一公主ホタルニ嫁セシ時蠶卵ヲ携ヘ來リシヨリ養蠶
ノ業始テ西域ニ傳ハリシ事ハ土地ノ古傳ニ存シ亦キヤ
ツト、舊記及唐書ニモ見ヘシト雖其時代分明ナラス
或ハ四百十九年ノ頃ノ事トシ或ハ六百三十年代ノ事ト
ス右ハ多分北魏ノ朝ニ關セシトナラン其傳ヘニ初メ、ホ
タル人東方ノ國ニ於テ養蠶ノ業アルヲ聞キ使ヲ遣シテ
其樹ト虫トヲ乞ヒシニ東國ノ領主皆ニ之ヲ許サ、リシ
ノミナラス國境ノ税關ニ嚴命ヲ下シテ此物品ヲ出ス
ヲ禁セリ後ホタル領主婚ヲ漢土ニ求メ其公主ヲ迎ルニ
至テ使者ニ命シ國王ニ告ケシメテ曰ク此地方公主ノ爲

メニ蠶桑布帛ノ衣服ヲ製スヘキモノナシト公主之ヲ聞
テ密カニ蠶卵及桑種ヲ取テ之ヲ帽子中ニ隠シ以テ關守
ノ監察ヲ免ル、トヲ得テリ其ホタルニ達スルニ及ンテ
桑ヲ種ヘ蠶ヲ養フテ紡織ノ業遂ニ始マル仍テ其記念ト
シテ城下ノ東南ニ一寺ヲ建テ之ヲルトセ、ト稱セリ唐ノ
代其處ニ老桑猶存スル數椽使者至リシ時之ヲ示シテ此
地方始生ノ樹ト曰ヒシト云フ
唐書于闐傳ヲ案スルニ初無ニ桑蠶焉隣國ニ不肯出、其王即求
婚許之將迎乃告曰國無帛可持蠶自爲、衣女聞置蠶帽絮中、
關守不敢驗、自是始有蠶女刻石約無殺蠶蛾飛盡得治、爾
西域聞見錄ニ或曰和闐即古于闐而回人稱漢人爲赫探漢
任尙都護西域遣其人衆於此和闐回子皆其遺種故回子呼

之爲赫探城和蘭赫探之訛音也
 リツタル右ノ説ヲ駁シテ、ホタン、ハ、サンスクリット、ノ、シ
 スタン、ヨリ來リ地ノ乳房タル義ナリトテ其名ノ出處ヲ
 土民ノ古傳ニ歸ス
 大唐西域記ヲ案スルニ當時インド人ハ漢土ヲ摩訶至那
 國ト云ヒシト見ユ此支那ノ稱中アジャニ於テハ古代ノ事
 ハ詳ナラスト雖元時代既ニ、ハダイ又ハ、カタイ、ト稱セ
 シモント見ヘ方今コトカン、ブカラ邊ノ、サルト及キルギ
 一説ニ、ハダイ或ハ、カネイ、トハ舊ト漢土ノ北部ヲ指シタ
 ル稱ナリト、ロシヤ人ノ漢土ヲ、キタイ、ト云フモ蓋シ是ヨ
 リ來ル歐人ノ、モシ、シ、ル、此、編、漢、土、ナ、ハ、皆、モ、ロ、コ、レ、ト、訓、人、

天山南路
通商ノ概略

右天山南路ノ土著地方或ハ諸城邑ノ大略ナリ各地方ノ物
 産額及商賣ノ事ニ至テハ詳ナラス然レ此四五年前カシガ
 ル地方ヲ、ロシヤ界ヲ經テ西トルキスマン、ト通商ノ概略ハ
 稍考フヘキ者アリ即チ千八百七十六年ロシヤ、ノ陸軍大佐
 クラバイツキン、カシガル地方ヲ經歷シ税關ヲ査閲シ商人
 ノ記録等ヲ集メテ作りシ輸出入表ナリ今其表ヲ案スルニ
 當年ロシヤ中アジャ領ノ境界ヨリ、カシガル、ニ輸入セシ物
 價ハ二十四万八千六十八ルーブル、ニシテ其物品ノ比例ハ、
 ロシヤ更紗百分ノ四十三、羊二十半、茶十二半、鐵具五、砂糖二、
 染具二、其餘一分ニ足ラサルモノ及品目詳ナラサル雜貨合
 計十四半ヲ成セリ又カシガル地方ヨリ輸出物價ハ百十萬
 千二百二十二ルーブル、ニシテ其物品ノ比例ハ綿織物、絲及
 雜貨、物、混、合、ト

百分ノ八十一、絹布五、衣服五、毛氈四半、絹布一、明鑾一、其他ノ
 雜品六分ヲ成セリ
 インド地方トノ商賣ハ其以前此地方ヲ經歷セシ、カレスニ
 コ、フ、ノ調査ニ據ルニ絹布、羊毛、阿片ヲ輸出品ノ最モ大ナル
 モノトス其價額凡ソ二十餘万ルーブル其他金銀亦相應ニ
 出ツ又輸入物ハ、イギリス更紗及他ノ織物類稍多シ
 當時ヤシブハバク天山南路ニ割據シ各地戰爭斷ヘスシテ
 商業一般衰微ノ時アリシト雖モ輸出品ノ多キヲ猶此ノ如
 シ土地ノ豐饒推シテ知ルヘシ
 天山北路
 天山北路ノ方ハ巴里坤ヲ以テ東部ノ第一城トス其城哈密
 ノ西北四十三里天山北脚ノ谷間ニ在リ本名巴爾庫勒類蒲

巴里坤

今西府滿漢ノ移民及土民等各別郭ヲ成シテ住居ス山北
 ノ土地一般寒シ五六月頃尙ホ雪霰降ルヲアリ土人裘ヲ衣
 テ寒ヲ禦ク大小麥、黍、蕎麥ノ熟ス山陰松樹繁茂シ野性群ヲ
 成ス北ニ巴爾庫勒湖アリ一ニ之ヲ蒲類海ト稱ス
 三州輯略曰ク蒲類海在巴里坤西北沙山下長一百餘里蒲
 類縣因此海得名考漢遺寶固耿乘擊破白山虜於蒲類海上
 又班超將兵擊伊吾於蒲類海即此俗名婆息厥海南山軍台
 由助巴泉東南登山嶺即望此海
 バルクル、ヨリ北路ノ往還天山ノ北麓ニ並フテ西伊犁ニ至
 ル其間凡ソ四百餘里城堡相望ニ村驛相連ナル右ハ皆清國
 ニ於テ此地方ヲ平定セシ後屯田兵ヲ設ケ罪人等ヲ移シ土
 地ヲ開墾セシメテ土著村落成リシモノナリ其中古城烏魯

古城

木齊、瑪納斯、庫爾喀、喇烏蘇ノ諸城稍著ハル
 古城ハ、バルクルノ西百八十二三里ニ在リ同シク滿漢人土
 民雜居ノ城ナリ此ヨリ沙漠ヲ經テ東北科布多及西北塔爾
 巴哈台ニ兩岐路通シテ北路要衝ノ地タルニ因リ清國ニ於
 テ早ク城ヲ築ヒテ之ヲ固メダリ本道ハ、クイチエン、ヨリ博
 克達冰嶺ノ北ニ並フテ西ニ赴キ阜康村邊ヨリ漸々南ニ轉
 シテ烏魯木齊ニ至ル其路凡ソ七十里
 烏魯木齊ハ古_今迪化州天山北路ノ一重鎮ニシテ舊ハ鞏寧城
 ト稱スル堅固ナル城アリ滿漢ノ移住民及ドンガン雜居シ
 テ廣大ナル市區ヲ成シ商民輻湊シ茶寮酒肆並列シテ稍々
 繁華ナル所ナリシト雖_且最後ドンガンノ謀叛ニ因テ漢城
 及清國人ノ家屋ハ盡ク亂民ノ毀ツ所トナリ城下半ハ破壞

烏魯木齊

セリ後清之ヲ恢復スルニ及ンテ新ニ軍鎮ヲ設ケ城壘ヲ築
 キ内外ノ工商漸次來リ集マリテ方今復タ新ニ一都城ノ形
 ナ成スト云フ
 ウルムチ近傍ノ土地平曠東南ノ山谷ヨリ溪河支流シ水甘
 ク草肥ヘテ耕牧トモニ大ニ便ナリ其東南ノ山ヲ紅山ト稱
 ス舊城趾アリ
 西域聞見錄曰ク城西一帶沙岡環繞其下產煤旺盛城東南
 即博克塔班三峯入雲冰雪晶瑩望之如琉璃世界靈蹟最著
 故俗以靈山呼之ト
 三州輯略曰ク鹽池海大小二區一在城南二十里名曰小鹽
 池周二里許一在迤南一百二十里之昂吉爾圖淖爾軍台之
 前長八十餘里中流止水無波兩岸積鹽盈丈層々堆壘儼如

白玉堅氷土人或以車載或以騾馱賣資民食每斗售價不過四五分爲烏魯木齊第一稱便之事ト又曰ク烏魯木齊巴里坤在天山之北麓漢車師後王庭地烏魯木齊即古輪臺也西陸紀略云輪臺在廣州之西亦曰命頭漢書命頭皆作輪臺至昭帝時扞彌太子賴丹爲校尉田輪臺即是回語謂禾稼爲烏魯木以其地可種禾稼故名蓋古輪烏魯木音相近也桑宏羊言輪臺以東捷枝渠犁皆可屯田唐書地理志云西州交河縣北行經柳谷度金沙嶺至北庭都護城今烏魯木齊舊城是也

ウルムチノ西五十八九里ニ瑪納斯城アリ又其西四十三里ニ庫爾喀喇烏蘇城アリ本ト皆屯田兵村ニシテ各區壁ヲ設ケ鎮守兵ヲ置キシ所ナリ然モ多クハ、ドンガン、ノ毀ツ所ト

ナリ方今僅ニ其遺址ヲ留ム

マナス、ヨリ、ソルカラ、ウス、ニ至ル十二里前圭屯驛場ヨリ一路北ニ分レバ爾魯克山ヲ越ヘテ西北塔爾巴哈台ニ赴ク此路凡ソ二百十二里

塔爾巴哈台ハ一ニ楚呼楚ト稱ス城靖舊ト、チイラト土爾扈特部ノ牧場アリ其土宇廣濶ニシテ西北キルギース、ニ隣シ又ロシア、ニ界シ北匪緊要ノ地タルヲ以テ伊犁平定後此ニ城ヲ築キ人ヲ移シテ一方ノ軍鎮ヲ立テタリ後ロシア、ノシベリヤ、ト交易場トナリ品物貿易ノ數年々益シ千八百五十三年ニハ、十五萬五千ループル餘ノ商賣アルニ至リシト云フ然モ最後ノ亂ニ他城ト同シク、ドンガン、ノ毀ツ所トナ

クルカラ、ウス、ヨリ西五十二三里ニ精河城アリ此ヨリ一路西南ニ分レ、トグルスウ、ト稱スル溪水ニ循ヒ博羅布爾嶺ヲ越ヘテ伊犁ニ出ツ之ヲ捷路トス而シテ本道ハ西賽里木湖ニ出テ湖ニ沿ヒ西南塔爾奇山ヲ越ヘテ同シク伊犁地方ニ入ル之ヲ、タルキ越ト稱ス精河城ヨリ伊犁城マテ凡ソ九十里ト算フ

精河城ヨリ伊犁地方ハ余ノ自ラ經歷セシ所ナリ故ニ以下重モニ當日ノ見聞ヲ記ス

精河

精河城ハ其壞壁ニ就テ之ヲ考フルニ舊時ハ頗ル大ナル處アリシト見ユ然レモ壁内壞瓦散亂シ或ハ草蔓滋生シタル荒蕪ノ地多シ皆最後ノ騷亂ニ、ドンガン及ヌランチ等清人ノ家ヲ毀チシ跡ナリ今存スル所ハ本街一條ニシテ横街ハ

假小屋處々ニ孤立シ破屋相參ハル其本街ハ甚ク長ク東西兩方ニ猶清國風ノ門ヲ存ス其東門ノ側ニ關羽ノ廟アリ叛民之ヲ動サ、リシト見ヘ其肖像堂宇及他ノ佛像トモニ全ク舊形ヲ存シテ奇觀ヲ成ス住民ハ、ヌランチ、ドンガン及清國人ナリ戸數ハ五六百ニ過キス清國風ノ旅宿ニアリ
ダンホー、ハ沙漠中粘土質ノ沃野ニ在リ其沃土ノ連ナリシ所ハ城壁ヨリヨリ西北及西南ニ沙磧カニ變セリ方處々村邑ノ跡アリ皆ドンガン、ノ毀チシ所トス其間田園荒蕪シ或ハ雜木林ヲ成ス然モ絶ヘテ大ナル樹木ナシ城下ノ近傍ハ田野善ク開ケ四方ノ曠原ニハ雉鳥多ク野羊亦群ヲ成シテ行クヲ見ル

氣候ハ十一月中旬外套ヲ用ヒス野外ニ散步シテ稍暖カナ

ルヲ覺フ然モ冬ハ常ニ雪アリ一二月ノ頃ハ亦頗ル寒シト云フ

賽里木湖ハ、チンホー、ノ西ニ在リ周廻凡二里其水清澄ニシテ甘シ南岸ノ水邊皆砂磧且水急ニ深シ然モ其水底透碧三四間ノ間圓石尙ホ觀ルヘシ

群山起伏シテ湖水ヲ繞ル其東方少シク開ケ本道東ヨリ來テ此ニ出ツ山ハ大抵草生ヘテ樹木ナシ唯南山ノ北麓ニ處々杉林アリ路其下テ廻リ湖岸ニ沿フテ迤南タルキ峠ニ上ル其峠ハ甚ク高フシテ此ヨリ湖水一面及東北ノ諸山皆脚下ニ見ヘ山外曠野ノ觀開ケテ風景殊ニ佳ナリ

西域聞見錄此湖水ノ事ヲ記シテ曰ク有巨澤曰賽里淖兒其神青羊大角而多鬚見則雨雹ト

伊犁地方土地

伊犁トハ古ノ本ト河ノ名ナリ天山西北ノ山谷西ニ開ケテ三角ノ形ヲ成ス其間平地帶布シテ中ニ一大水流ル之ヲ伊犁河トス第一編河ノ部ニ詳カナリ而シテ河ニ傍ヒシ谷間ノ土地一面及クシゲス、テケス諸河水ノ流ル、所ムザルト嶺以北ホロホロ嶺以南ヲ總テ、イリ地方ト稱ス其幅員チ千二百三方里ト算フ

凡ソ、イリ河ノ左右南北兩山脚ノ間ハ皆膏腴ノ土地ニシテ灌溉ノ利亦善ク通シ村邑處々ニ散布シテ開墾田野相連ナル唯、河岸ノ土地一帶舊惠遠城邊ヲ除クノ外柔カナル沙磧或ハ葦叢ニシテ南北ヨリ奔流スル溪水モ河ニ達セスシテ其地ニ伏スル者多シ故ニ土著ニ便ナラス山上山腹ハ各地草肥ヘテ大ニ牧畜ノ資ニ富ム

沿革

此地方ハ舊ト、ジユンガル、ノ牧場ニシテ其衆百万ト稱セシ
所ナリ千七百五十年代清シユンガル、ヲ剿シテ殆ント其衆
ヲ殲シ更ニ内外ノ人ヲ移シテ土地ヲ開墾セシム爾來滿漢
蒙古トシガシ、タランチ諸種雜居ノ城邑成リ人戸大ニ繁息
ス千八百六十年代ノ始ニ至テ甘肅ノ亂起ル、イリ、ノ、ドンガ
ン亦戈ヲ操テ起リ、タランチ、ト與ニ清ノ諸城ヲ攻メテ之ヲ
屠ル尋テ、ドンガン及タランチ互ニ相爭鬪ス、ドンガン遂ニ
敗レテ全地方タランチ、ノ所領ニ歸ス然レ幾ハク、モナクシ
テ又ロシヤ、ノ扼スル所トナル之ヲ、イリ地方近世ノ沿革ト
ス

住民

方今イリ、ノ住民ハ、タランチ最モ多シ、ロシヤ、ニ於テ此地方
ヲ占領セシ翌年即チ千八百七十二年ノ人口調査書ヲ案ス

舊惠遠城

ルニ凡ソ、タランチ五万五千八百九十一人ドンガン五六千人
清國人四五千人免諸方ニ奔竄シテ後歸リ來リシモ外ニ錫伯、索
倫等ノ屯田兵一万五千四百四十八人^{早ケク}叛民ニ降テ^七八ケ^村ヲ
アギル^ス、^二万^二千^三百^餘人^山西^南及^東南^ノシユンガル
一萬二千餘人^山東^北及^西北^ノロシヤ人及他人ヲ并セテ全地
方ノ人員總計十一萬四千三百三十七人トスト見ヘタリ
舊ト、イリ地方ノ都府タリシ惠遠城或ハ新クリツシヤ、ハ最
後ノ騷亂ニ因リ他ノ諸城ト與ニ盡ク叛民ノ毀ツ所トナリ
今ハ、イリ河ノ右岸ニ唯、壞壁破瓦或ハ家屋ノ遺址ヲ存スル
ノミ其場所甚々廣シ然レ多クハ既ニ荆棘ニ没シテ茫々タ
ル荒原ニ變セリ唯、其中央邊ニ方リ大ナル臺石上ニ御影石
ヲ以テ刻ミシ獅子ノ像存スルアリ此像舊ト一對ナリシト

見へ一ハ地ニ落テ壞レ一ハ半面及足尾ノ邊少シク缺ケシ
 モ猶其形ヲ存セリ又其傍ニ同シク破壊セシ大ナル石碑ア
 リ右ハ乾隆帝ノ詔ヲ刻セシモノト見ヘタリ外ニ其邊ニ物
 ナ彫刻セシ缺石ノ類散亂セシモ復タ其形ヲ辨スルヲ能ハ
 サリシカ此ハ衙門ノ跡ニテ最後落城ノ時鎮將ノ火藥庫ニ
 火ヲ放チシ所ナルヲ以テ其爆裂ノ勢ヒニ因リ此ノ堅石類
 モ皆碎ケシモノナラント云フテ西ニガシ、ノ亂ル方ヨリ起
 方スル急所ナリ、ノ退鎮將、兵ヲ率、ドシ、及、途、中、亦、起、リ
 爭フ、遠、城、ノ、諸、人、ヲ、悉、ク、此、千、八、百、十、三、年、之、間、諸、城、皆、落、チ、
 絶死シ、城、中、ニ、食、糧、ル、清、鎮、人、其、妻、子、三、万、餘、人、ハ、火、五、六、万、人、ト、モ、放、
 皆死ス、概、死、ス、概、死、ス、概、死、ス、概、死、ス、概、死、ス、概、死、ス、概、死、ス、概、死、
 此處河岸甚タ高フシテ十數丈ノ斷崖ヲ成シ河水其下ヲ繞

固爾札

テ流ル前岸ハ卑ク且一面ノ平野ニシテ南方其盡クル所ヲ
 見ス唯遙ニ一大山天ニ際シテ横蓋雲ノ如キヲ見ル之ヲ南
 山或ハ、ウズンヌ、ウ山トス
 是ヨリ北ニ距ル二里半許ドンガンノ居住スル、スイドン
 城アリ又東北ニ十里許ランナノ居住スル、グリツヤ
 札或ハ寧遠城アリ之ヲ方今イリ地方ノ都府トスヤ、ハリ、
 ニシテ、寧遠城ノ名、ク、リ、初、メ、此、寧遠城、早、ク、成、リ、人、其、地、名、
 舊、寧遠城、ト、相、對、シ、テ、新、ク、リ、新、ク、リ、ヤ、ノ、名、ヲ、以、テ、著、ハ、ル、ニ
 クリツヤ、固爾、ハ、イリ河ノ右岸ニ在リ河岸ヲ距ル凡ソ三
 十町煉瓦ノ高壁ヲ繞ラシテ城郭ヲ構ヘタリ郭内ノ大道ハ
 敷クニ小形ノ圓石ヲ以テシ煉瓦ヲ以テ築造セシ水道其側
 ニ通ス此ハ、カシカ及カラスウ河ヨリ水ヲ引テ住民ノ使用

ニ供スル者ナリ家屋ハ中アシヤ一般ノ構造ト同シク大抵皆粘土ヲ以テ塗リ屋阜ク内暗シ市區ハ、ダランチ清ノ二部ニ分レ兩方各市場アリ市街ノ不潔ニ至テハ互ニ相讓ラス清人ノ方ニ瓦覆朱塗ノ佛堂一アリ堂宇ノ結構頗ル美麗ナリ且其庭邊平石盤布シ老松森鬱トシテ榮々四境閑靜儘遊歴人ノ休息ニ宜シ之ヲ、クリンシヤ第一ノ遊觀所トス外ニ清人ノ料理店二三軒アリ物價廉ニシテ雜客常ニ之ニ滿ッ油炒葱椒等ノ香氣亦遠ク外ニ聞ユ

此兩區ノ間ニ又一大市場アリ諸方商賈ノ出店此ニ集ル種々ノ日店又其近傍ニ散布シ人馬常ニ雜還シ城中最モ繁華ナル所トス、ロシヤ商人ハ店ヲ其一隅ニ開キ官吏ハ別ニ家ヲ郭外ニ建テ居住ス

千八百七十二年シリツシヤ城内ノ家屋調ヲ查シテ、グレノ宗寺一カトリク宗寺一佛堂ニマホメット宗寺三十六、人家千二百五十八總計千二百九十八戸、人口七千六百九十三ト具セリ其區別左ノ如シ

種別	ロシヤ人	ロシヤ兵	タランチ	ドンガン	清人	他人	總計
男	四七	九七一	二〇八三	二〇二	九七六	三七〇	四六四九
女	十五	—	一、八八二	二〇六	七七六	二二五	三〇四四
合	六二	九七一	四〇八	一七五二	五九五七	六九三	

他人トハ、ジユンガル、キルギース及中アシヤ諸城ノ、サルト等ヲ謂フ

此地方ノ商賈ハ舊ト清人キルギースト物品ヲ交易スルニ止マリシニ後ロシヤト通商始マリテ漸々昌盛ニ赴キ千八

百五十四年ニハ、ロシヤ、ヨリ輸入ノ額百三十九萬三千六百餘ルーブル、ロシヤ、ニ輸出ノ額五十五萬九百餘ルーブルニ及ヒシト云フシヤ、清國、西部ノ著述ノ商賣ト思ヒシ、ヲ懸テ、ロシヤ、最後ノ騷亂ニヨリ、其通商中絶セシニ、ロシヤ、此地方ヲ占領シ、四境平穩ニ歸セシ、以來、商賣亦漸ク始マリシト雖、其額猶甚、僅少ナリ、城内雜商店凡ソ六百五十アリ、然、稍、大ナル商賣ハ、マシケント、コ、イ、カン、カシガル諸城ノ、サルト及マタル等ニ屬ス、此商人等ウエルヌイ及コバル、ヨリ、ロシヤ製ノ更紗、布、回絨、羅紗、鐵具等ヲ輸入シテ、羊、羊毛、生皮、陶器、狐皮、犀角等ヲ輸出スト云フ

土民ノ産業ハ、重モニ耕作及牧畜ニ在テ、諸製造物ノ業ハ、甚々微々ナルモノナリ、千八百七十二年ノ調査ニ據レハ、クリ

ツシヤ中左ノ職戶及職人アリシト見ユ

職 業	數	職 人
油 榨 所	一〇	七八
紙 漉 所	四	二四
鐵 所	五	二〇
陶器製所	二	六
染物所	一	五
麵 製 所	三	六
總 計	二五	一三九

クリツシヤ南方ノ山ハ、煤炭ニ富ミ、處々ニ炭礦アリ、舊ハ皆清國ノ官有ニ屬シテ、常ニ採掘セシト雖、騷亂以後、多クハ荒廢ニ歸セリ、其中クリツシヤ、ノ近傍ニ、ロシヤ、ノ一士官、此二三年前ヨリ、新ニ採掘ニ着手セシ、炭山アリ、其主人ノ招キニ、應シ、一日往テ、之ヲ見シニ、清國ノ舊習ニ依ルヲ以テ、益アリト爲シ、五六人ノ礦夫ヲ使用シ、三角形ニ穿テ、タル洞中ニ就テ、古風ナル採掘ヲ爲スヲ見ル、主人ノ説ニ、此炭層ハ甚

夕廣大ニシテ質亦良シ若シ採掘法ヲ善クスレハ唯此一口
 ノ炭以テ、イリ地方ノ需用ヲ充スニ足ルヘシ又曰ク近傍ニ
 鐵礦アリ舊ハ清國ニ於テ同シク採掘シ此炭ヲ其製鐵ニ用
 ヒテ礦山ノ業頗ル盛ンナリシト其製鐵所ノ跡トテ炭山ノ
 傍ニ大ナル建物ノ遺址アリ四邊鐵渣ノ堆積セシヲ見ル
 イリ、ノ沃野モ沙ヲ雜ヘタル粘土ニシテ最モ米麥ニ適シ穀
 物ノ收穫甚マ豐饒ナリト云フ故ニ其價亦廉ニシテ七千八百
 年ニ就キ七八カベ市場ニ於テ麥ノ粉一ブト凡ノ四買四百目
直ノ價亦始シモ、ロシヤノ兵ノ來リシヨリト云フ價然レ目下他處ニ米
比スルハ猪ノ大内外ノ價ナリモ一此地方一般生計ノ保チ易キ
所ト稱ス
 夕リツツロヤ、ノ大市場ニ於テ衆種族ノ會合ヲ見ルモ亦奇ナ

リ凡ソ、夕ラナンチ、ドンガン、サルト、ハ勿論ブルートキルギ
 ス、シユンガル、ダグル、シウイフ漢、滿、蒙古、ロシヤ人皆集マリ
 各種各別ノ容貌ヲ存シテ衣帽斑雜同聲異音此處ニ談話シ
 彼處ニ買賣シ歩騎混合シテ東西ニ動ク狀況ハ恰モ人種ノ
 博覽會ヲ觀ルカ如シ
 夕リツツロヤ、ノ氣候ハ寒暖共ニ随分酷マシトス凡ソ夏ハ陰
 暖三十度ニ上リ冬ハ寒二十四度ニ下ルコアリ然レ其極度
 長ク保タヌ一年平均愉快ノ氣候トス園中梨、林檎ハ勿論桃、
 李、石榴、葡萄、桑亦生ス蓋シ高山三方ヨリ此地方ヲ圍ンテ善
 ク寒風ヲ防クニ因ル

中アジヤ紀事第四編卷之二

新疆略史上

新疆ハ古ノ西域ナリ漢土ノ史傳ヲ案スルニ初メ秦漢ノ
 間北ニ匈奴アリ西北ニ月氏アリ又其西北ニ烏孫アリ烏
 孫ノ南ニ焉耆、龜茲、莎車、疏勒、于闐等ノ諸國所謂西域三十
 六國アリ又其西南ニ塞アリ匈奴、月氏、烏孫、塞皆畜ニ隨テ
 牧シ所謂行國ナリ匈奴ノ冒頓單于起ルニ及ンテ西月氏
 ナ撃テ之ヲ敗ル月氏西ニ走テ烏孫ニ逼リ又西南塞ヲ逐
 フテ鳩水今ノ、アリヤム河邊ニ移ル是ニ於テ匈奴益、強盛其威
 西北ニ震フ烏孫及西城ノ諸國皆其羈縻スル所トナル漢
 烏孫ト縁ヲ結ンテ西域ヲ招撫シ車師今ノ、トルクワンチ或ニ
 屯田ヲ設ケ都護ヲ置キ以テ匈奴ノ右臂ヲ斷チ其威勢ヲ

ノ北ニ任スル家ノ所ヲ引テ云フニ若シ此セハ其人民ハト、
 嶽種ニ任セル者ヤトセサルヲ得ス、ヘロドト、ノ紀、事ニ此
 出陣及一ノ種ノサハ下ニ度得スルヲ上持ニ尖頭帳幕ニテ
 以テ著ハレトシ
 南北朝時代蠕々突厥相繼テ起リ隋唐ノ間突厥ノ勢ヒ甚
 々盛ンナリ後吐蕃南ニ崛起シ吐蕃略日、自唐威亨以後
 嵩等州今渭源、西、南、鄯、天、登、皆、降、於、吐、番、之、地、東、接、四、鎮、北、
 山抵、突、厥、伊、西、天、山、北、路、地、方、所、有、矣、而、天、回、鶻、亦、北、
 突厥入、大、回、紇、東、極、室、蓋、西、抵、金、山、南、控、大、漠、盡、得、古、匈奴、地、
 五代ノ時ニ至テ契丹又起リ宋ノ代最モ強盛チ以テ著ハ
 ル
 右ノ大略ハ皆史傳ニ由テ見ルヲ得ヘシ然レ匈奴以來年

元時代ノ
察哈台

代相距ルヲ太マ遠ク其傳亦備ハラサルヲ以テ各種族興
 亡變化ノ跡ヲ考究スルニ由ナシ西域ノ諸國ニ至テモ其
 間或ハ互ニ相併セ或ハ前ニ數ヘシ游牧民諸酋豪ノ羈縻
 スル所トナリシト見ユルモ其沿革ニ至テハ別ニ案スル
 ニ足ルモノナシ唯元四鄰ヲ併セ西域亦其版圖ニ入りシ
 以來稍考フヘキ者アリ然レ準噶爾時代ニ至ルマテノ事
 ハ荒唐ノ傳多キヲ以テ下文之ヲ記スル亦其大略ニ過キ
 ス
 元ノ太祖成吉思汗西域ヲ嚆平シ盡ク諸王駙馬ヲ以テ其君
 長トス而シテ二子察哈台チガイチ土爾給斯坦ニ封ス、ヂヤガタイ
 天山ノ南ニ治シマルカスウ成、ハ、カ、シ、ガ、ル、モ、云、フ、ハ、サ、其同族ヲ
 分配シテ諸部ノ酋長トシ自ラ之ヲ總ヘテ所謂西域ノヂヤ

ガタイ國ヲ成ス
 チヤガタイ、ノ子孫數世相傳ヘテ、トグルクニチムル汗ニ至
 ル千九百五其間宗統繼續ノ爭亂アリ諸部多クハ分立シ葱
 嶺以西亦別ニサマルカンド王國ヲ成ス
 トグルクニチムル汗稍英明且其チンギス一族中始メテ、マ
 ホメツト宗旨ヲ受ケシテ以テ最モ著ハル初メ此地方ニ佛
 教行ハレ隋唐ノ間其宗教甚々盛ンナリシハ當時西域ヲ説
 ク者言佛教ニ及ハサルナキヲ以テ知ルヘシ然ルニ西曆七
 百年代ニ至テ、アラビヤ、ノ名將、クナエイハ、或ハ、バク
 コーカン、ヨリ兵ヲカシガル、ニ移シ服屬ノ人民チシテ強ヒテ、マ
 ヲト宗ヲ奉セシムシアラビヤ東部軍ノ略スル所トナルシ
 年遂ニ長ク屈セズ、アテラビヤ軍ノ名將多ク死シ其墳墓今ニホ
 五

スタン及フケルチド造スルニ、アラビヤ人侵入以前ニ此地方崇
 黒衣ノ邪教(吐蕃)ニ屬セシト見ユ、チベツノ各地方ニカモ
 紛擾ト取リテアリト多ク、爾來マホメツト宗漸ク廣マリ佛教
 隨テ衰微ス然レ千三百年代ニ至ルマテハ兩宗教猶並ヒ行
 ハル、トグルクニチムル汗マホメツト宗ヲ受ケルニ及ンテ
 諸部酋長多クハ之ニ倣ヒ其宗教大ニ蔓延シテ遂ニ遍ク土
 民ノ奉スル所トナル
 トグルクニチムル汗アグスウ、ヨリ、カシガル、ニ徙リ末年遂
 ニ、サマルカンド、ヲ略シ其子ヲシテ此ニ治セシムリ、ゴ
 東ナガルキ、ヲ復セシニハ唯、トグミル、チムル、其度マ、ウ
 此ト西トルキ、ヲ遠スルニハ、タメシラシト見ニ、本文姑ク、
 説ニキ、然レ其死後國內大ニ亂レ、カマルエザン、カシガル

スルタン
|| サイド

ニ據リ、タメルラン成ハ、チ亦サマルカンド、チ扼シテ、ヂヤ
 ガマイ、ノ宗領遠ニ其統ヲ失フ
 千三百八十八年タメルラン大舉シテ東ニ向ヒ遂ニ盡ク天
 山南北ノ土地ヲ平定シ、トグルク||ナムル汗ノ孫ヲ、カシガ
 ル王位ニ復セシメテ西サマルカンド、ニ歸ル
 千四百年代内亂復々起リ國遠ニ、カシガル及アリスウ、ノ二
 部ニ分レテ互ニ相争フ四方ノ野民亦其隙ニ乘シテ侵掠至
 テサル所ナシ夫ノ英名ヲ以テ著ハレシ、カシガル領主スル
 タン||サイド出ルニ及ンテ内外ノ亂始テ定マリ四境漸ク平
 穩ニ歸ス然レ幾ハクモナクシテ又宗旨黨派ノ争ヒ起ル
 初メ西トルキスタン、ニ於テ、タメルラン、ノ治績漸ク著ハレ、
 マホメツト宗教大ニ振興シテ其都府サマルカンド宗門學

宗黨分派
ノ事
ホツシヤ

黨派ノ凌
標

士ノ淵藪トナリ諸方ヨリ來テ經テ講スル者多シ其中マホ
 メツト、ノ後裔ホツシヤ或ハフジヤ、トハ、ベルシヤ語ニテテ學士
 トルキスタン、ニ於テ、マホメツト||アジヤム、ト稱スル者最
 モ宗學及道德ヲ以テ名アリ衆之ヲ尊敬ス後カシガル、ニ來
 リ其王及土民ノ信愛スル所トナリテ二子カリ、ヤン及イサ
 ク是等ノ名ハ皆弟、子ヨリノ尊ト與ニ留住ス千四百年代ノ
 見ニシトカリ、ヤン及イサク同ク、ホツシヤ、ノ名望アリ其父死
 スルニ及ンテ各宗教傳授ヲ以テ業トス弟子群ヲ成シテ其
 門ニ集リ兄カリ、ヤン、ノ方ヲ白山ト稱シ弟イサク、ノ方ヲ黒
 山ト稱シテ講習討論風ヲ成ス
 右ホツシヤ兄弟授クル所ノ大意ニ至テハ別ニ異ナルヲ無
 カリシト雖モ或ハ其人ト爲リノ同シカラサルニ因リシヤ

後其弟子自ラ白山黒山ノ兩派ニ分レテ宗教ノ爭論ヲ起シ其
黨類諸方ニ蔓延シテ宗派ノ争ヒ漸次國事ニ推シ移リ國內
兩黨軋轢ノ勢ヒ遂ニ成リ骨肉相殘フテ紛争已マス清國ハ
白黒黨ト稱シテ之ヲ分ツ

ホツコヤ
アバク

千六百四十五年ノ頃白山派ノ、ホツコヤ、アバク、ト稱スル者
道德ヲ以テ著ハレ四方ヨリ之ヲ慕フテ來ル者多シ此時カ
シガル領主ハ、トグルク || チムル汗ノ後裔イズマイル、ニシ
テ黒山派ノ信向者タリ白山黨ノ勢ヒ漸々強ク且アバク、ノ
名望日ニ高キヲ見テ之ヲ忌ミ遂ニ、アバク、ヲ放逐ス、アバク
大ニ之ヲ怨ミ初メ、カシミル、ニ走リ後其怨ヲ、カシガル王ニ
報ヒント欲シ轉シテ西藏ニ赴キ其王達賴喇嘛ニ親近シ因
テ準噶爾ノ應援ヲ求ム

準噶爾西
域ヲ屬ス

準噶爾ハ西域ノ蒙古ナリ初メ元ノ亡フヤ蒙古分レテ漠南
内家古漠北外家漢西特爾拉ノ三大部トナル而シテ其漠西或ハ西
域ニ在ル者亦準噶爾、杜爾伯特、土爾扈特、和碩特ノ四部ニ分
レ、シユンガル、ハ伊犁ニ治シ、トルベツト、ハ額爾齊斯ニ治シ、
トルゴウト、ハ塔爾巴哈台ニ治シ、ホシヨト、ハ烏魯木齊ニ治
ス之ヲ四衛拉特ノ蒙古ト稱シテ其衆天山西北ノ曠野ヨリ
南青海ニ連ナリテ牧セリ
明ノ末ホシヨト、ノ固始汗ウルムチ、ヨリ入テ青海ニ據リ唐
古特ヲ擊テ之ヲ破リ藏ニ入り喀木ヲ略シテ其威勢甚々熾
ナリ而シテイリ、ノシユンガル亦漸々近鄰ノ諸部ヲ兼併シ
一大部落ヲ成シテ東喀爾喀蒙古ト相接シ共ニ勢威ヲ争フ
千六百年代ノ半ハニ、シユンガル、ノ酋長僧格死ス弟噶爾丹

シユンガ
ル、カ
ス、チ
略

其長子ヲ殺シテ自立シ、クンタイシ、王ノ尊號ガ
ルノ位ニ即キ勢ヒ益々強盛途ニ盡ク他ノ三部ヲ併セテ其威令既ニ青海ヨ
リ、チベットニ及フ此時會カシガル、ヨリ逐ハレシ、ホツジャ、
アパク應援ヲ求ムルノ事アリ、ガルマン乃チ其機會ニ乘シ
千六百七十八年兵ヲ率テ、カシガル、ニ入り直チニ此地方ヲ
押領シ、ホツジャ、アパク、ヲ立テ代官或ハ領主トシ償金ヲ取
リ年貢ヲ定メ舊王ノ一族ヲ率テ、イリ、ニ還ル此ニ至テ元ノ
太祖チンギス汗ノ繼統始テ斷ヘ、ホツジャ一族之ニ代ル而
シテ天山南北ノ土地尽ク、シユンガル、ニ歸ス
シユンガル王ガルタシ勇ニシテ略アリ善ク其衆ヲ用ヒテ
向フ所殆ント敵ナク既ニ西域ヲ蕩平シ西バルカシ湖ヨリ
東南チベット、ニ連ナリシ莫大ナル土地ヲ領シテ、シユンガ

ガルマン
清國ニ逼

リヤ王國ヲ成シ又東喀爾喀蒙古ヲ併セント欲シ、イリ、ヨリ
牙帳ヲ阿爾泰山ニ移シテ其隙ヲ伺ヒ且トルベツト部衆ヲ
シテ屯田シ且耕シ且牧シテ兵食ヲ峙ヘシム會喀爾喀ノ土
謝圖汗其鄰部ノ札薩克圖汗ト争フテ互ニ相闘フ千六百八
十八年ガルマン輕騎三万ヲ領シ杭愛山ヲ逾ヘテ其帳ヲ襲
フ土謝圖汗倉卒拒キ戰フテ大ニ敗レ近鄰ノ諸部ト路ヲ分
チ東ニ奔テ清國ニ投ス時ニ清ノ康熙二十七年九月ナリ
此時清ノ康熙帝既ニ四方ヲ平定シテ其精銳當ルヘカラサ
ル勢アリシカ先ツ蒙古ヲ撫シ、シユンガル、ニ諭シテ、カルガ、
ノ侵地ヲ還ヘシ其衆ヲ率テ西ニ歸ラシム、ガルマン聽カス
遂ニ其地ニ據リ猶進取ノ計ヲ爲ス千六百九十年カルガ、チ
追フテ以テ名トシ東侵シテ烏魯會河ニ至ル清ノ尙書阿爾

尼蒙古ノ兵ヲ以テ之ヲ拒ク、ガルトマン擊テ之ヲ敗ル其威内
 蒙古ニ震フ是ニ於テ清帝遂ニ親征ニ決ス同年康熙十九年清ノ
 大軍左右翼ニ分レテ古北口及喜峯口ノ兩路ヨリ出ツ右翼
 ノ兵ヲユンガル、ニ烏朱穆秦ニ遇ヒ戰フテ復タ利アラズ、ガ
 ルタン遂ニ勝ニ乘シテ南ニ進ミ清兵ト烏蘭布通ニ會シテ
 大ニ戰フ、ガルトマン遂ニ敗レ營ヲ拔テ宵遁ル過クル所皆燒
 荒以テ追騎ヲ絶ツ清兵之ヲ追フ既ニ及ハス
 ガルトマン科布多ニ還リ新ニ兵ヲ徵シ糧ヲ蓄ヘテ再舉テ圖
 リ屢清帝ニ書ヲ贈リテ土謝圖汗ヲ索メ又陰カニ使テ内蒙
 古ノ諸部ニ遣ハシテ之ヲ離間ス千六百九十五年復タ自ラ
 兵三万ヲ率テ東ニ向ヒ克魯倫河ニ沿フテ下リ進ンテ巴顏
 烏蘭ニ陣シ秋ヨリ冬ヲ過ク明年春清帝將軍薩布素ヲシテ

ガルトマン
敗ル

東三省ノ兵ヲ率テ東路ヨリ出將軍費揚古等ヲシテ陝甘ノ
 兵ヲ率テ西路ヨリ出シメ帝自ラ親兵ヲ總ヘテ獨石口ヨリ
 其中路ニ出全軍與ニ克魯倫河ニ向テ進ム、ガルトマン大軍ノ
 近ツクヲ見テ戰ハスシテ退リ西路ノ兵之ヲ昭莫多蒙古ニ
 山デヤラモトニシテ北ニ河ヲ渡テ其ト其地土拉河ノ南ニ在リ三
 邀撃ス、ガルトマン奮戰シテ多シ將士ヲ失ヒ遂ニ敗走ス是レ
 ヨリ其威勢復タ振ハス清帝之ヲ降サント欲シ屢使ヲ遣シ
 テ招撫ス、ガルトマン從ハス後遂ニ憤死ス是ニ於テ其所部半
 ハ降り、アルタイ山以東ノ土地皆清國ノ版圖ニ入ル
 初メ、ガルトマン僭立ノ時兄僧格ノ二子策妄拉布坦其父ノ舊
 臣等ト稽カニ通逃シテ隙ヲ規フ、ガルトマン數年ノ間兵ヲ東
 南ニ用ヒ遂ニ敢軼スルニ及ンテ、ツチワンニラバマン、イリ、

策妄拉布
坦起ル

ニ還リ、ボラト河邊ニ游牧シ散亡ヲ收集シテ羽翼漸ク成
ル此ニ至テ、ガルマン、ノ尸ヲ清國ニ送り之ト、アルマイ山ヲ
畫シテ和シ又悉ク衛拉特ノ四部ヲ併セ、ガルマン、ノ覇業ヲ
中興シテ其勢ヒ復々大ニ振フ
是ヨリ先キ哈密及吐爾番ノ酋長各使ヲ清國ニ遣シテ款ヲ
通ス年順治然未幾ハクナラスシテ皆ヨウニガル、ノ征服ス
ル所トナリ後相合シテ與ニ清ノ邊境ヲ侵ス、ヨウニガル取
ル、ニ及ンテ、ハミ、ノ酋長ガルマン、ノ子及其所屬ヲ俘ニシ
テ清ニ獻シ以テ罪ヲ謝ス清兵入テ、ハミ、ニ據ル是ニ於テ山
南ノ諸城カシガル、ヤルケンド亦動ク、ツチワシラブタン
之ヲ聞テ兵ヲ勒シテ出急ニ、カシガル及ヤルケンド、ヲ扼シ
土民ヲシテ別ニ代官ヲ撰ハシメ舊城主ア、フメット及ダニ

噶爾丹策
零、カ
ガ、ヲ侵
カス

ル兩ホツツヤ、ヲ率テ、イリ、ニ歸ル
ツチワシラブタン、ノ威勢益強ク千七百年ノ始メニハ青
海及藏亦其左右スル所トナル清其青海ト交通ノ路ヲ斷ン
ト欲シ千七百十三年ハミ、ヨリ兵ヲ發シテ、トルフワン、ヲ略
セシム、ヨウニガル邊へ擊テ大ニ之ヲ敗リ追フテ、ハミ、ニ至
リ其城ヲ屠ル
千七百二十年康熙九年清兵復々、ハミ、ニ出ツ此時ヨウニガル
皆引去リ、ハミ、トルフワン備ヲ設ケス清兵其空虚ニ乘シ翌
年遂ニ進ンテ、トルフワン、ニ據ル會、青海ノ變アリ其酋長羅
布藏奔テ、ヨウニガル、ニ投ス雍正元年清使ヲ遣シテ之ヲ索ム、ツ
チワシラブタン應セス
千七百二十七年ツチワシラブタン死ス子噶爾丹策零立

ツ、ガルトマン^{II}ナールン兵ヲ好ムコ其父ノ如シ屢ドルフワ
ン、ルンナン、ノ諸城ヲ襲フテ之ヲ奪ハント欲ス是ニ於テ清
其諸城ヲ修メテ守備ヲ固フシ又將軍傳爾丹ヲシテ科布多
ニ城カシム
千七百三十一年^{九年}正ガルトマン^{II}ナールン進ンテ、コブド、
ニ逼リ清兵ヲ博克托嶺^{アルクイ}ニ誘ヒ出シ撃テ大ニ之ヲ
敗ル斬獲算ナシ明年又自ラ大衆ヲ率テ東カルガ、ヲ侵ス此
時清既ニ推河、翁金河及拜達里克河ノ處々ニ城ヒテ之ニ備
フ、ガルトマン^{II}ナールン間道ヨリ進ミ蒙古ノ兵ト喀喇森齊
泊ニ會シテ大ニ戰フ衆寡敵セズ退ヒテ鄂爾昆河ニ戰フ復
タ利アラヌ後遂ニ和ヲ乞フ清博克托ノ敗ニ懲リ復テ兵ヲ
用ユルヲ欲セズシテ之ヲ許ス

シユンガ
ル亂ル

此間カシガル地方ハ先ニ、ヌチワン^{II}ラブマン亂ヲ定メ、アハ
フメット及ダニル兩ホフヤ、チ、イリ、ニ拘致セシ後白山黒山
兩黨派ノ紛争新ニ起リ遂ニ復ダ、ダニル、チ、ヤルケンド、ニ還
シ黒山黨ノ威勢ヲ以テ山南ノ諸城ヲ總轄セシメダリ、ガ
ルト^{II}ナールン、ノ時ニ至テ猶舊ニ依リシモ、ダニル死スル
ニ及ビテ其長子チ、ヤルケンド、ニ、二子チ、カシガル、ニ、三子チ、
アンスウ、ニ、四子チ、ホオン、ニ封シテ勢力ヲ分テリ爾來各地
方黒山黨ノ固ムル所トナリ騷亂亦暫ク已ム
千七百四十五年ガルトマン^{II}ナールン死ス嗣子殘忍ニシテ
殺戮ヲ擧、ニシ遂ニ近臣ノ殺ス所トナリ繼續ノ争ヒ尋ヒテ
起リ、シユンガル、ノ所部大ニ亂ル此時ツチワン^{II}ラブマン、
ノ外孫阿睦爾撒納ト稱スル者アリ、ガルトマン^{II}ナールン、ノ

清ヲユン
スガ
ル、チ
征

孫達瓦齊ヲ擁シテ仇敵ヲ剪除シ後自立チ計テ其事成ラヌ
千七百五十四年所部ヲ率テ清ニ奔リ乾隆帝ニ熱河ニ謁シ
テ具サニ伊犁ノ取ルヘキ狀ヲ陳ス帝大ニ喜ヒ、アムルサ
ナ、親王ニ封シテ遂ニ意ヲ西征ニ決ス
千七百五十五年乾隆ニ春清班弟ヲ定北將軍トシ、アムルサ
ンナ、ヲシテ之ニ副ヒ北路ヨリ烏里雅蘇台ニ出シメ永常ヲ
定西將軍トシテ西路ヨリ巴里坤ニ出シ、兩路ノ兵各二万
五千五月兩軍ボラトラ河ニ會シテ伊犁ニ向フ諸部戰ハス
シテ降ル、ダワチ抗スルヲ能ハス其親近ト南氷嶺ヲ越ヘテ、
ウチトルフワン、ニ走ル酋長霍吉斯之ヲ執ヘテ清ニ贈ル
此時故ノカシガル領主ア、フメツト、ノ二子執ハレテ、イリ、
在リ長チ布羅尼特ト稱シ次チ霍集占ト稱シテ皆白山派ノ、

ホツシヤ、ダリ清人ノ稱ス、ホツジヤ、ノ和卓木トアムルサンナ彼地方
人心ノ向フ所ヲ知リ清將ニ陳シ、アラニート、ニ少シク兵ヲ
授ケテ直ニ山南ノ諸城ヲ徇ヘシム清將之ニ從フ、アシスウ
及ウチニトルフアン皆直ニ之ニ應ス、カシガル、ヤルケンド、
ホダシ、ノ諸城ニ至テハ黒山黨ノ勢ヒ強クシテ之ニ抗シ兵
ヲ集ム游牧民ブルート等亦來リ加ハル是ニ於テ進ントテ、ア
ラニート、チ、ウチニトルフアン、ニ圍ム城將サニ陥ラントス、
アラニートブルート、ニ陷ハシムルニ利チ以テシテ内應セ
シム、ブルート忽チ心ヲ變シテ反撃ス、カシガル諸城ノ兵遂
ニ敗走ス、アラニート勝ニ乘シテ長驅ス、カシガル戰ハスシ
テ降ル因テ又直ニ、ヤルケンド、チ攻メテ之ヲ取ル是ニ於テ
山南ノ諸城大概皆復メ白山黨ノ手ニ歸ス

此ハルニシテナ既ニ清兵ニ藉テ其同族ヲ誅鋤シ又山南ノ地
方ヲ収ム此ニ至テ自ラ、チイラト四部ノ長トナリ專ラ西
域ヲ制セント欲シ密カニ親近ヲ集メテ之ヲ計リ清兵ノ漸
々撤去スルヲ待テ事ヲ舉ク四方響應シテ之ニ從フ將軍班
第及イリ駐防ノ清兵五百與ニ皆其殺ス所トナル因テ清復
タ兵ヲ發シテ之ヲ討ツ諸道交戰リアラス、ヨユンガル益猖
獗清帝其德ヲ以テ懷クヘカヲサルヲ見テ更ニ將軍成袞札
布ニ命シテ北路ヨリ出將軍兆惠ニ命シテ西路ヨリ出各大
軍ヲ率テ、ヨユンガルヲ剿ヒシム乾隆二十五年會、ヨユン
ガル諸部亦自ラ相呑噬シ且痘疫流行シテ死亡相望ム兆惠
ノ兵長驅シテ至ル諸部盡ク潰ヘ、アムルサシナ奔テ哈薩克
トキルギニ投ス兆惠其副將富徳ト兩翼ヲ張リ兵ヲ分ツテ數

路ヨリ、イリ、ニ入り、ヨユンガル、ヲ搜討シテ斬殺幾ント盡ク
ス、ヨユンガル遂ニ亡フ
兆惠ノ一軍アムルサシナ、ヲ窮追シテ、イリ、ヨリ、キルギース
曠野ニ出ツ、カザク或ハ、キルギース之ニ抗ス清兵擊テ之ヲ
敗リ進シテ其牙帳ニ逼ル、アムルサシナ、ロシヤ、ニ奔リ後痘
ヲ患ヘテ死ス、カザク及東ブルイト、ノ酋長皆各其衆ヲ率テ
出降ル、イリ平ク
此時カシガル領主ブヲニト、ノ弟チイチイチエン留テ、イ
リ、ニ在リ、アムルサシナ、ヲ助ケ衆ヲ率テ清兵ト戦フ、アムル
サシナ敗ル、ニ及ンテ走テ、カシガル、ニ還リ兄ブヲニト、
ニ勸メテ與ニ獨立ノ計ヲ爲ス將軍兆惠イリ、ヨリ、チイラト
ト、ヲ交ヘシ兵二千チ一將ニ附シ糧草ヲ徵スヲ以テ名トシ

往テ之ヲ偵ハシム其兵庫車ニ至リ半ハ叛民ノ殺ス所トナ
 リ半ハ走り還ル是ニ於テ叛民ノ捷報忽チ四方ニ聞ヘ諸城
 蠢起シテ、プラニート、ニ應ス
 千七百五十八年清將軍雅爾哈善ニ命シ、トルフワン、ヨリ滿
 漢ノ兵萬餘ヲ發シ進メテ、クウチヤ城ヲ攻メシム、プラニ
 ト兄弟之ヲ聞キ、アックスウ、ヨリ來リ援フテ遂ニ城ニ入ル清
 兵就テ之ヲ圍ミ攻撃スルヲ數日プラニート等間チ伺フテ
 潜カニ出去ル然ル城固フシテ拔ケス清兵乃チ地ヲ穿テ隧
 道ヲ作り將ニ城ニ及ハントス城兵之ヲ覺リ其外ヲ壘シテ
 水ヲ灌シテ焚クニ作ルテ之清兵六百餘溺死ス後城長圍ミテ
 突テ霄遁レ餘衆門ヲ開ヒテ降ル皆清兵ノ殺ス所トナル
 清帝雅爾善ノ、プラニート兄弟ヲ逸シ降人ヲ殘殺セシテ怒

リ其他ノ諸將ヲ并セテ之ヲ誅シ更ニ將軍兆惠ニ命シテ師
 チ南ニ移サシム時ニ、チーチエン、ヤルケンド、ニ據リ、プ
 ラニート、カシガル、ニ據テ東西相犄角ス兆惠其副將富徳ヲ
 アックスウ、ニ留メ大軍ノ集ルヲ俟テ繼テ進マシメ自ラ歩騎
 兵四千ヲ率テ先發シテ直ニ、ヤルケンド、ニ向フ十月其兵ヤ
 ルケンド、ニ達ス、チーチエン遊ヘ撃テ之ヲ敗リ遂ニ兆
 惠ヲ、カラスウ、ニ圍ム黒水營
 千七百五十九年一月富徳來リ援フテ、カラスウ、ノ圍ヲ解ク
 是ニ於テ兆惠軍ヲアックスウ、ニ還ヘシ暫ク休息シテ援兵ノ
 集マルヲ俟ツ
 明年春兆惠ウチトルフアン、ヨリ、カシガル、ニ向ヒ富徳ホ
 メン、ヨリ、ヤルケンド、ニ向ヒ各一万五千餘ノ兵ヲ率テ兩路

清新疆ヲ設ク

ヨリ並ヒ進ム、プラニート兄弟遂ニ城ヲ弄テ人畜ヲ驅テ西葱嶺山中ニ遁ル富徳及明瑞之ヲ驅々其先鋒追フテ、プラニート、ニ阿楚爾山ニ及ヒ斬獲甚多シ遂ニ窮追シテ巴達克山ノ界伊西洱庫河ニ至ル今伊西洱庫河ハ蓋ナリ方プラニート兄弟其妻子蓄僕等三四百人ト與ニ、バダクシヤン、ニ奔ル其餘ハ悉ク降ルヲバダクシヤン、ノ酋長後チ、アラニート兄弟シユンガリヤ及カシガリヤ或ハ東トルキスタン、ノ土地此ニ至テ盡ク清國ノ版圖ニ入ル清之ヲ并セテ新疆トシ、イリ、ムルハガマイ、ウルムチ、カシガル、ノ四鎮ヲ建テ參贊大臣辦事大臣及領隊大臣ヲ設ケ大小相統屬シテ各其方面ノ諸城ヲ管セシム其中イリ、ヲ新疆全部ノ重鎮トシテ別ニ將軍ヲ置ク唯コブドト及ウリ、ヤスダイ、ノ二部ハ之ヲ割テ別轄ニ

吏治

付セリ

土地人民ノ支配ハ舊ニ依リ各城或ハ各部阿木奇伯克ヲ設ケテ地方ノ長官トシ之ヲ參贊大臣或ハ辦事大臣ニ屬ス其位三品ヨリ六品ニ至ル、ハキムベク、ノ副官チ、イシク、アガベク、ト稱ス城數區ニ分レ區長チ、ミラ、ト稱ス皆土人ヨリ撰シテ之ニ任ス、ハキムベク、ノ叙任ハ將軍ノ奏聞ヲ經テ北京政府ノ命ニ出ルモノトシ其他ハ輕重ニ應シテ將軍或ハ大臣直ニ之ヲ命ス

土民ノ宗旨風俗ニ至テハ清國ニ於テ一モ關涉セス皆舊習ニ因ラシメタリ唯官ニ就ク者ハ裁判官ヲ除クノ外清國ノ衣冠ヲ着ケシメテ別ニ應賞ノ章ヲ定ム

裁判ハ舊ニ依テ、マホメット宗ノ制ヲ保メシメ、カジョー及ム、

城邑及戶

フチ官裁判ノ職員モ人民ノ撰定ニ任ス唯裁判所ニ清國ノ法
 官ヲ出シ其處分ヲ監視スルヲ得ルヲトス
 租税ノ法モ舊ヨユンガル時代ノ定メニ依リ原價二十分ノ
 一ヲ取り其徵取ノ方法ハ之ヲ土民ニ委任ス游牧人民ハ其
 酋長ヲハキムベクノ管轄ニ付シ家畜二十分一ノ税ヲ納メ
 シム
 西北及西南ノ山野ニ分牧スル、カザフ及ブルト制馭ノ法
 ニ至テハ邊境ノ要所ニ野堡ヲ設ケ兵線ヲ連テ之ニ備ヘ
 毎年イリ、タルハガマイ及カシガル、ヨリ別ニ兵隊ヲ派シ各
 部ノ牧場ヲ巡察シテ其畜類ヲ檢査シ馬ハ百頭ノ一羊ハ千
 頭ノ一ノ税ヲ納メシム
 天山南路ノ諸城ハ喀什噶爾、葉爾羌、英吉沙爾、和闐ヲ西四城

舊時ノ租

ト稱シ烏什、阿克蘇、庫車、哈喇沙爾ヲ東四城ト稱シ吐爾番、闐
 展、哈密其他小城ヲ合セテ十九城ヲ成セリ將軍兆惠ノ報告
 書ニ當時北京ヲ在リ傳ヘシ傳教士マ右諸城ノ外大小ノ村落ヲ
 一萬六千トシ、カシガル一部ノ總計入戸ヲ五萬ヨリ六萬マ
 タト算ス外ニ、ホッシャ、ニ隨テ奔リ後清兵ノ獲ル所トナリ
 今、イリ、ニ移サレシモノニ二萬二千五百人アリシト云フ
 一土民ノ總計人員ハ詳ムラス今天山南路ノ方ハ本文十九城及
 一萬六千村ノ人員ハ詳ムラス今天山南路ノ方ハ本文十九城及
 民ヲ一推城ニ定住ムルキ一萬人ノ平均ニ割シテ右城村ノ當
 リ時此方ノ二ハ二萬過外ノ人口ハ
 又同將軍租税ノ事ヲ陳セシ大略ニ此地方ノ人民舊準噶爾
 王ガルダン及ツチツン、ラブマン、ノ時銀三萬六千テンガ
 一ノテ一兩ガ、トスツチ納メシニ、ガルマン、ノ時ニ至

經濟

リ之ヲ増シテ六万七千テング、トシ外ニ麥四万八百パツマ
ン清ノバツ石五斗ハ木綿千四百六十キヤレクハ清ナヤレク、紅花
三百六十五キヤレクヲ納メ商人ハ別ニ銀二万テングガ紅銅
五百斤絨及敷物各四束他ノ織物及毛氈各二十六反ヲ納メ
又葡萄酒ヲ有スル者ハ七戸ヲ一組トシテ一組ヨリ乾葡萄
ヲ千斤ツ、納ムルヲ以テ定規トセリ然レ連年騒亂相續キ
人民大ニ減シ且甚々窮スルヲ以テ其稅ヲ減シテ休養セシ
ムルヲ要スト
兆惠土地ノ農商業衰微セシテ見テ之ヲ振興セント欲シ種
々ノ策略ヲ施ス其中アクヌウ、ニ造幣局ヲ設ケ、ヤルグン
産ノ紅銅及不用ノ大砲等ヲ集メ乾隆通寶錢五十万餘ヲ鑄
テ土地通用ノ、アル錢ト並ヒ行ハレシメ以テ市場金錢ノ融

山北ノ狀

通ヲ開キ、ヤルケンド及ホタン邊ノ破山ヲ興シテ金玉採掘
ニ從事シ又家畜ノ不足ヲ憂ヘ游牧人民ニ稅ヲ拂ハスシテ
之ヲ驅リ來ルヲ許シ且一般ニ關稅ヲ減シテ四方近鄰ト通
商ノ便ヲ圖リシニ土地自然ニ殷賑シ清國內地ヨリ出ル茶
ノ需用等大ニ廣マル後チカシガル城西隅ノ一都會トナリ、コ
トカン、オガラ、ア、フガニスメン地方ト貿易ノ關係亦歲ニ繁
劇セント云フ
天山北路ノ方ハ烏魯木齊以西舊ト皆シニシガ、ノ牧場ニ
シテ人口百數十万ト算ヘシニ其中凡ソ十ノ四ハ末年流行
ノ痘疫ニ死シ三、ハ兵戈ニ殲キ二ハ、ロシヤ及キルギース、ミ
奔リ清兵イリ戡定後ハ僅ニ十ノ一ヲ存セシモ亦皆四方ニ
奔竄シテ土地空虛トナリ數百里間一氈帳ナキニ至ル

聖武記

イリ地方ハ初メ清兵營ヲ、イリ河岸ニ結ンテ駐防セシニ其
 土地肥沃ニシテ耕作ニ便ナルヲ以テ後清國ニ於テ之ヲ開
 墾スルコトニ決シ千七百六十年乾隆十五年ニ參贊大臣阿桂ニ命シ
 テ屯田ノ業ヲ起サシム同年阿桂アックスウ、ヨリ滿州索倫驍
 騎五百綠營兵百土民三百ヲ率キ、ムザルト冰嶺ヲ越ヘテ、イ
 リニ出ヨユンガル、ノ殘餘ヲ招撫シテ屯田開墾築城ニ着手
 セシヲ以テ此地方經營ノ始トス爾來廣ク屯田ノ計畫ヲ立
 テ殖民事業ニ從事シ凡ソ歩兵ノ土著スルモノヲ兵屯トシ
 騎兵ヲ騎屯トシ、マホメツト宗ヲ奉スル人民或ハ回民ヲ回
 屯トシ農商民ヲ戶屯トシ内地謫戍ノ流民ヲ流屯トシテ之
 ヲ類別シ地ヲ撰ヒ渠ヲ疏シ器具ヲ與ヘテ開墾ノ業ニ就カ
 シメシニ内外ノ地ヨリ衆民陸續來着シテ各屯ノ戶數年々

益シ千七百六十八年ニハ一ノ移住回民六千三百八十三戶
 トナルニ至レリ
 築城ノ工事モ亦大ニ進ミ千七百六十四年イリ河ノ北岸ニ
 築キシ周廻一里餘ノ惠遠城成リ後又此ニ兵營ヲ増築シ四
 營ノ兵ヲ分列セシメテ、イリ將軍ノ駐劄所トス其前後外ニ
 八城成リ清國人民市街ヲ成シテ其中ニ居住シ土民亦各々
 壁ヲ廻ラシテ村ヲ立テ千七百七十四五年頃ニハ、イリ、ノ土
 地漸々開ケ穀物ノ需用ハ既ニ之ヲ内地ニ仰カサリシト云
 フ
 天山北麓ノ土地ハ西イリ、ヨリ東バルクル、ニ至ルマテ凡ソ
 耕作ニ便ナル所ハ、イリ、ト同シク新ニ開墾シテ城邑ヲ設ケ
 後ウルムチ、ニ都統ヲ置キ天山北路イリ以東ノ諸城及南路

成兵

ノ、トルフツン、ハミ等ヲ并セテ其管轄ニ付ス千七百八十三
 年ウルムチ管内ノ人口ヲ十万二千餘外ニ屯田兵ヲ四万餘
 戸ト算ヘリ三州屬自乾隆壬午至今四十年餘ノ部集農民二萬九
 百餘戶陸地九千五百餘頃
 清國ニ於テ最後北路ノ征討ニ兵五万ヲ用ヒ南路ニ三万ヲ
 用ヒ南路平クニ及ンテ半ハ其兵ヲ撤シテ更ニ駐防換防ノ
 成兵ヲ設ク凡ソ家族ヲ携ヘテ永遠守衛スル兵ヲ駐防ト稱
 シ輪班更替スル兵ヲ換防ト稱ス北路ニハ駐防ヲ設ク多ク
 ハ滿州兵タリ南路ニハ換防ヲ用ニ其兵陝甘ノ二省ヨリ出
 ツ
 千七百年代ノ末南北路ノ總兵ヲ大小官員トモニ凡三万ト
 算ニ其各方面ニ分配ノ大略ハ、イリ、ニ一萬二千、タルハガタ

結

イ、ニ二千、ウルムチ、ニ一萬千、カシガル、ニ五千ノ割合タリシ
 ト云フ西睡要略
 清ノ康熙、雍正、乾隆三代相踵テ兵ヲ西北ニ用ヒ遂ニ、シユン
 ガル、ヲ平ケ、カシガリヤ、ヲ定メテ新疆ヲ闢キシ大略此ノ如
 シ前二代ノ事ハ詳ナラス乾隆時代兩路ノ出師ニ銀三千餘
 万兩ヲ費用セシト云フ此ノ如キ大事業ニハ各國ト同シク
 清國ニ於テモ得失相償ハサルノ説起リ後冗費ヲ論スレハ
 動モスレハ新疆ノ事ヲ引テ證トスルニ至リシト見ユ其得
 失ハ守成ノ法如何ニ在リトシテ暫ク之ヲ闕キ清國ニ於テ
 此舉ニ由リ國內繁齒ノ戸口ヲ分ツ好殖民地ヲ得西部ノ國
 境ヲ固フシ物産輸出ノ路ヲ廣メシ利益ニ至テハ實ニ大ナ
 ルモノト言フヘシ

清國ノ威
葱嶺以西
ニ震フ

新彊略史下

清既ニ新彊ヲ定メ盡ク邊境ノ野民ヲ服屬セシメテ其威大ニ近隣ニ震フ、コトカン^罕王亦歸服ヲ請フテ其保護ヲ仰シ因テ葱嶺以西ノ諸國ニ於テ清猶西征セント欲スルノ説起リ或ハ其兵既ニ境ヲ越ヘシト傳フルニ至ル是ニ於テ、ブカ^ザ及アフガニスタン、ノ諸王大ニ懼レ同盟ヲ結ヒ宗旨軍ヲ唱ヘテ兵ヲ徵ス千七百六十三年其先鋒既ニ、ホツセン^ト、ニ達ス然レモ清兵肯ヘテ其境ヲ越ヘス諸王亦自ラ爲ストナク唯バダクシヤン、ヲ罰レ、ウチ^トルフワン、ノ變ヲ促シテ已ム

是ヨリ先キ、バダクシヤン王カシガル領主プラニート、ヲ殺シテ其尸ヲ清國ニ贈リ以テ好ミヲ通ス、アフガニスタン王

ウチ
ルフ
ツン
ノ變

之ヲ聞テ大ニ怒ル此ニ至テ、バダクシヤン、ヲ攻メテ王ヲ殺
シ其城ヲ屠ル
ウチ^トトルフツン、ノ、ハキムベク^{地方}長官アブドラ、ト稱スル者
本ト、ハミ、ヨリ出暴戻ニシテ親ヲ其屬役ト與ニ官ノ威ニ
霜ヲ利欲ヲ縱、ニス又辨事大臣蘇成酒色ニ耽リ事ヲ顧ミメ
客々ク、ノ妻ヲ官署ニ留メ兵卒ヲシテ裸逐セシメ見テ以テ
樂トスルニ至ル人民憤怨訴フル所ヲ知ラス會、アカラ及ア、
ヲカニスダシ王等應援ノ約ナリ千七百六十五年住民一同
兵器ヲ操テ亂ヲ爲シ、ハキムベク及清ノ官吏守兵ヲ并セテ
盡ク之ヲ殺ス是ニ於テ、アクヌウ及クウチヤ駐防ノ清將各
兵ヲ率テ之ニ赴ク皆叛民ノ敗ル所トナル然レ其間ニ又カ
シガル及イリ、ヨリ萬餘ノ清兵來會シ城ヲ圍ンテ之ヲ攻ム

新疆
騷亂
ノ原因

叛民防キ戰フ^一三ヶ月然レ期スル所ノ應援至ラス城遂ニ
陥リ城内ノ住民盡ク清兵ノ殺ス所トナル
ウチ^トトルフツン、ノ亂後二年ヲ過キテ又昌吉ノ變アリ千
七百六十七年^{乾隆二十二年}ウレ^ハチ管内ノ昌吉城ニ於テ謫戍ノ
屯田官吏中秋ノ夕ヲ以テ流人ヲ稿ヒ酒ヲ山坡ニ置キ男女
雜坐シテ興ヲ遣ル官吏醉ニ乘シ流婦ニ偪テ誣ハシム流人
激怒シテ俄ニ變ヲナシ官吏ヲ殺シ軍器ヲ奪ヒ遂ニ城ニ據
テ叛ス、ウルムチ、ノ駐防兵進ンテ之ヲ討ツ叛民支フル能
ハス幾ハクモナクシテ事平ク後乾隆帝屢、ウチ^トトルフツ
ン及昌吉ノ二役ヲ舉ケテ新疆官吏ノ大戒トセシト云フ、
右ノ亂後清國ニ於テ官吏精選ノ法ヲ立テ號令嚴ニ行ハレ新
疆全部五六十年間無事ヲ保テリ然ルニ千八百二十年代ニ

至テ、ホツシヤ侵入ノ役起リ新疆西部無窮ノ騷亂復始マル
初メ清國ニ於テ新疆各地ニ無償ノ工役ヲ興シテ城壘ヲ築
キ又諸城ハキムベク等ノ官吏ニ多クハ東部ノ人ヲ用ヒシ
事等稍土民不服ノ本トナリ且歳ヲ經ルニ從テ法度亦漸ク
弛ニ官吏ノ任選其人ヲ得スシテ土民ヲ凌辱シ私利ヲ營ム
ヲ以テ常トスルニ至リ土民ノ不平益内ニ長ス其中或ハ、コ
ーカン地方ニ移住シテ清國ノ殘暴ト故郷ノ困苦トヲ説ク
モノアリ同宗同族ノ人々ヲシテ自ラ相憐ムノ情ヲ起サシ
メ内外ノ、マホメツト宗民皆怨ニ清國ヲ敵視スルノ勢ヒ漸
ク成ル

チエンギ
ルノ亂

テ、ホツシヤノ威權ヲ復センコトヲ試ム然レモ其事成ラス後
コーカーン、ニ潛匿シ故郷ノ脱走人ヲ集メ亡國ノ事ヲ談シテ
慷慨憤激與ニ恢復ヲ圖ル清之ヲ知リ羽翼ヲ成サンコトヲ懼
レ、コーカーン王ヲマシメ、ト約シ年ニ銀一萬兩ヲ拂フテ之ヲ看
守セシム故ニ、サルイム、サク、ハ遂ニ勳ク、一能ハサリシカ
其二子チエンギル、張格爾、トニ、チ氣力アリ父ノ志ヲ繼テ
竊ニ間ヲ伺フ時ニ、カシガル地方ヨリ移住スル者益多ク天
山ノ、ブルート中亦清國ヲ怨ム者アリ
千八百二十年コーカーン王ヲマル死ス、チエンギル乃チ故國
ノ脱走人等ト與ニ奔テ、ブルート、ニ投シ其衆數百ヲ率テ、カ
シガル、ノ邊塞ヲ襲フ然レモ戰ヒ利アラシテ退ク清兵之ヲ追
ハス因テ復タ、ナリン河源ニ據リ宗旨軍ヲ唱ヘ義兵ヲ募テ

出沒邊塞ヲ侵ス、カシガル人民中密カニ之ニ通スル者アリ
 清兵出レハ輒チ遁ル千八百二十五年道光五年秋參贊大臣永芹
 兵五百ヲ遣シ塞ヲ出テ其不意ヲ掩ハシム、チエンギル之ヲ
 偵知シ初メ清兵ノ鋒ヲ避ケ後其歸路ヲ山谷ニ斷ツテ之ヲ
 殲ク又是ニ於テ其捷報急ニ四方ニ傳播シ雜兵來リ加ハル
 者日多シ千八百二十六年五月チエンギル烏合ノ兵ヲ率
 井突テ、カシガル、ニ出ツ清兵逸ヘ撃テ大ニ敗レ退テ漢城各
 城ノ邊ニ設ケシ兵營ナルバヲ保ツ、チエンギル就テ之ヲ圍ム、ヤン
 々サル、ノ住民之ヲ聞テ皆起リ各清兵ヲ殺シ其城壘ヲ毀ツ
 テ援兵ヲカシガル、ニ送ル七月ニ至テ、コーカン王亦大軍ヲ
 率井來テ、チエンギル、ヲ助ク城ヲ攻ム城下ラヌ其兵ヲ以テ漢
 シギル、ト和去セルス

清兵漢城ニ據リ敵ヲ四方ニ受テ防キ戰フ一十七日援軍至
 又ス糧食亦竭キテ屢革ヲ食フニ至ル後守將既ニ事ノ爲ス
 ヘキナキヲ見テ自殺シ城遂ニ陷ル清兵六七千皆之ニ死ス
 一ニ清兵所遁ナリ山道チンクマ宗ヲ倫ニ於テカシガル兵四
 百人シノ外皆殺ス
 チエンギル既ニ西四城ヲ恢復シ、ホツシヤ、ノ威權ヲ以テ善
 ク白山黒山ノ兩黨派ヲ調和シ亦有リ人民喜シテ之カ用
 ヲ爲シテ事業大ニ進マ、アグスウ亦動ク然レバ、チエンギル
 其機會ニ乘セス徒ニ、カシガル、ニ坐シ吏治ノ改革ニ從事シ
 テ兵ノ集マルヲ待ツ其間千八百二十七年ノ始メニ至テ諸
 道ノ清兵アグスウ、ニ集リ率リ將軍長齡イリ、ウル兵ヲ率井武
 臨阿吉林各里都江ノ兵進取ノ計ヲ爲ス

同年二月將軍長齡及楊遇春兵三萬一トニ率テ、カシガル、
 ニ向フ、チエンギル乃チ、カシガル、ヤルケンド、ホタン、コーカ
 ン、ブルート等ノ大衆ヲ總ヘ、ヤンギバード、ニ出陣シテ之ヲ
 遊フ清兵三方ヨリ砲ヲ放ツテ進ム、コーカン、ノ兵先ツ動ク
 餘衆之ニ繼テ走ル、チエンギル支フルヲ能ハス遂ニ大ニ敗
 レテ山中ニ遁ル三月長齡進マテ、カシガル、ニ入り諸將ヲ分
 遣シテ他ノ三城ヲ復セシメ又楊遇春楊芳ヲシテ兵八千ヲ
 率ニ塞ヲ出テ、チエンギル、ヲ追捕セシム
 六月楊芳阿頼ニ出テ楊遇春色勤庫ニ出テ各軍ヲ南北ニ分
 テ叛黨ヲ搜索ス然レモ楊芳アライ山中ニ於テ、コーカン兵
 ノ襲フ所トナリ且兩方共ニ糶糧ニ窮マテ遂ニ獲ル所ナクシ
 テ還ル

清チエンギル、ノ後患ヲ爲シテ懼レ必ス之ヲ獲ント欲シ
 爵郡王金十萬ヲ懸テ之ヲ購ル此時チエンギル殘兵ヲ糾
 合シテ再舉テ圖ル長齡土人ヲ塞外ニ出シ揚言セシメテ曰
 シ清兵既ニ撤去シ、カシガル空虛住民首ヲ翹テ、ボツジヤ、ヲ
 望ムト而シテ自ラ備ヲ嚴ニシテ之ヲ待ツ、チエンギル果シ
 テ兵五百ヲ以テ來リ襲フ清兵擊テ之ヲ敗リ追テ喀爾鐵
 蓋山ニ至リ斬獲殆ント盡クス、チエンギル僅ニ身ヲ以テ免
 ル後チアルトト之ヲ欺キ執ヘテ以テ清ニ獻ス茲フラス、ノ
 底ニ曰ク從テ供セリギル、帝亦北京ニ見送シテ欲ス大田等
 セルノ清帝懼レ史治ニ遊テ陳テ口舌ノ府監ヲ失ハシメ成
 極帝メニ一錫モ帝シテ問故ニ答フ帝前ニ能ハス遂ニ口裁
 食ヲ寸斷メシテ犬ニ

コ
ー
カ
ン
王
カ
シ
カ
ン
ル
チ
擾
亂
計
ル

初メ、ナエンギル、ノ禽ニ就クヤ將軍長齡コーカーン及ブカラ、
ニ檄シテ其家族ヲ索ム、コーカーン之ニ答フルニ兵民ハ出ス
ヘシ然レモ、ホツツヤ、ノ子孫ヲ出スハ其經典ニ於テ例ナキ
ヲ以テシテ應ゼス因テ清國ニ於テ盡ク、カシガル地方ニ住
セシ、コーカーン人ヲ拘留シ其賞産ヲ没入シテ通商ヲ絶ツ
此ノ時コーカーン王ハ、モハメツト||アリ汗メリ輔相其人ヲ
得既ニ近鄰リ、ヤルギス、ヲ屈伏セシメ又カラテメシ、ダ
ルス、ノ諸國ヲ略シテ其威勢稍盛シナリシカ清國ノ通商ヲ
絶ニ至テハ大ニ窮シ遂ニ兵力ヲ以テ其難ヲ解カントテ圖
ル時ニ、チエンギル、ノ兄ホツツヤ、モハメツト||ユス、フ
ブカラ、ニ在リ、コーカーン王ホツツヤ、ノ威勢ニ非レハ、カシガ
ル人民ノ與ヨシ難キヲ知り密ニ、モハメツト||ユス、フ、チ、フ

モ
ハ
メ
ツ
ト
ユ
ス
フ
ノ
亂

カラ、ヨリ迎ヘ之ニ説クニ、カシガル恢復ノ事ヲ以テシ千八
百三十年九月其將ハシグル及レシケル等ヲ附シ兵四万ヲ
率テ、カシガル、ニ入ラシム、コーカーン、ニ移住ノ、カシガル人
一萬餘亦軍ニ從テ出ツ
カシガル鎮守ノ參贊大臣札隆阿警ヲ聞キ兵ヲ、カラシ
及シユイ、ニ出シテ之ヲ拒ク皆コーカーン兵ノ敗ル所トナ
ル、モハメツト||ユス、フ勝ニ乘シテ長驅シ直ニ、カシガル、ニ
迫ル城中ノ人々白山派ニ屬スル者ハ皆出テ迎ヘ黒山派ニ
屬スル者ハ清商等ト奔テ漢城ニ投ス、モハメツト||ユス、フ、
カシガル、ニ入ル其兵黒山黨ノ家屋ヲ搜括シ鈔掠到ラサル
所ナシ後モハメツト||ユス、フ、コーカーン兵ヲシテ漢城ヲ攻
メシメ自ラ、カシガル、ノ兵ヲ率テ、ヤンギサル、ヲ略シ又ヤ

ルケンド、ヲ取テ之ニ據ル
 明年春清ノ援軍又諸道ヨリ、アンスウ、ニ集ル時ニ參贊大臣
 札隆阿カシガル漢城ニ據リ辨事大臣璧昌ヤルケンド漢城
 ニ據ル皆敵兵ノ圍ム所トナリ僅ニ其壘壁ヲ保ツ會、コイカ
 ン、ブカラ、ト隙ヲ生シテ其兵ヲ召還ス是ニ於テ、コイカン、ノ
 兵各地圍ヲ解キ縱掠シテ去ル、モハメツトユス、フ獨リ清
 兵ニ抗スル能ハサルヲ知其近ツクニ及ンテ亦自ラ遁ル
 白山黨ノ人々隨テ奔ル者六七万人而シテ清ノ援軍達セシ
 時ハ各城皆既ニ空虛タリ
 明年春清帝大學士長齡及イリ將軍玉麟ニ命シ、カシガル、ニ
 赴テ善後ノ計ヲ爲シム時ニコイカン、ヨリ使者三人至リ新
 ニ通商ノ事ヲ議ス長齡其一人ヲ留メ他ノ二人ヲ還ヘシテ、

善後ノ計

ホツシヤ、ヲ獻シ兵民ノ虜トナリシ者ヲ回ヘサシム十月ニ
 至テ其使者歸リ報ス曰ク被虜ノ兵民ハ釋還スヘシ然レモ
 ホツシヤ、ヲ出スハ經典ナキ所ナリト其言辭甚々驕リ且通
 商ノ外コイカン商民ノ稅ヲ免シ并ニ前ニ鈔沒セシ贖產ヲ
 返還スヘキヲ要求セリ長齡以爲ラク今カシガル、イリ及ウ
 チトトルフワン、ヨリ三路並ヒ進ムト聲言シ精銳三四万人
 チ選ンテ、コイカン、ヲ掃蕩スルハ難キコト非ス然レ塞外主客
 形ヲ殊ニシ且コイカン、及アルト、ノ界ニ鐵列克嶺アリ其
 路最モ險ナリ師ヲ勞シテ遠涉スルニ值ラス故ニ機ヲ相テ
 之ヲ竊曠スルノ計ヲ爲スニ如カスト清帝之ニ從ヒ盡ク其
 請フ所ヲ許シ、コイカン、ヲシテ嚴ニ、ホツシヤ、ヲ監守セシム
 ルヲニ決シテ和約成リ通商復々始マル

此和約ニ就キ、ソリハ一ノ、フ、ノ傳フル所チ案スルニ初メ、
 コーカン、ノ使節アリム。ハツシヤ、カシガル、ニ於テ所望
 ノ實チ達セス因テ清ノ長官ニ請フテ直ニ北京ニ赴キ左
 ノ條約ヲ結ヘリ

第一 凡ソ外國ヨリ、アクスウ、ウチトルフワン、カシガ
 ル、ヤンヌサル、ヤルケンド、ホタン、ノ六城ニ輸入スル商品
 税ハ之チ、コーカン、ニ與ヘ其利益ニ付スル

第二 右ノ税チ收ムル、爲メ前ニ數ヘシ諸城ニ、コーカン、
 ノ監商官ヲ置キ其中カシガル、ニ在ル者ヲ以テ、コーカン
 王ノ代理トシ他城ノ同役ヲ總ヘシムル

第三 前六城ニ來住スル外國人ハ皆コーカン監商官ノ
 支配ヲ受テ其警察ニ屬セシムル

第四 コーカン、ハ常ニ、カシガル、ノ、ホツジャ一族ヲ監視
 シテ其國境外ニ出ルイチ得サラシムヘシ若シ奔ルトア
 ラハ直ニ執ヘテ之ヲ禁錮スル

ソリハ一ノ、フ右條約ノ出處チ示サス右ハ多分コーカン、
 ヨリ得シモノナラン當時コーカン、ノ威勢稍強ク且清國
 ニ於テ甚メ、ホツジャ、ノ後患チ爲サンイチ慮リシニ因リ
 之ト和シテ、ホツジャ、チ羈縻スルニ如カストシテ大ニ讓
 ル所アリシハ知ルヘシ然レモ此條約ノ定ムル所甚メ清
 國ノ卑屈ニ過クルガ如シ原文中或ハ誤會ノ事アルチ免
 レス姑ク書シテ參考ニ供フ

清又長齡玉麟ノ建議ニ依リ、カシガル軍鎮チ、ヤルケンド、ニ
 移シ戍兵チ増シテ各城ノ守備チ固ラヌ其大略カシガル、ニ

兵三千、ヤンギサル、二千五百、ヤルルケンド、ニ六千、ホマン、ニ
五百、ヤルナウグ、ニ三千、アシスウ及ウチ、トルフワン、ニ各
一千都合一万二千ノ兵ヲ備マ又舊ヤルケンド、ノ辨事大臣
暨昌ヲ參贊大臣ニ任シテ、ヤルケンド、ニ治セシム
此後カシガル地方一新シテ吏治稍整ヒ、コイカン亦其利ヲ
重シシテ、ホツシヤ、ノ監守ヲ嚴ニシ千八百四十七年ニ至ル
マテ無事ニ過キ去レリ
千八百四十三年コイカン王モヘメツトアリ、ブカラ、ト戰
フテ敗死ス爾來コイカン、ノ威勢漸々衰ヘ政黨ノ争ヒ續ヒ
テ起リ内外多事アリ是ニ於テ、ホツシヤ一族カタヘン或ハ
カマテユリヤ、チ首トシ此機會ニ乘ジテ又密ニ、カシガル、ニ
入ラシメテ計ル

カマハン
ノ亂

千八百四十七年春ホツシヤ、カマハン及其同族六人相率
因テ之ヲ和カシガル移住人ヲ糾合シ、ブルト等ヲ驅テ
東ニ向ヒ清ノ戍兵一百ヲ、ミンユイ塞ニ覆ヒ直ニ進ンテ、カ
シガル、ニ逼ル城長ハキムカシム之ニ抗セント欲ス、コイカ
ン、ノ監商官ナメツト住民ヲ煽動シテ城門ヲ開カシム城長
及其他ノ之ニ從ハサル者ハ皆奔テ漢城ニ投ス是ニ於テ、カ
マハン入テ、カシガル、ニ據ル
カマハン檄ヲ四方ニ傳ヘ恢復ヲ唱ヘテ兵ヲ徵ス然レ諸城
多クハ前事ニ懲リテ之ニ應セス因テ大ニ兵備ヲ修メテ進
取ノ計ヲナシ十一月ニ至リ進ンテ、ヤルケンド、ヲ攻ム清兵
遼ヘ撃テ之ヲ敗ル、カマハン退ヒテ、カシガル、ヲ保マントス
住民門ヲ閉テ納レス、イリ、ノ清兵亦マラルバシ、ヨリ進ム、カ

タハン少シク之ト戦ヒ遂ニ又コイカン、ヲ奔ル、カシガル地
 方ノ住民罪ヲ懼レテ同シク奔ル者男女老少二萬餘人皆テ
 レク越ノ路ニ由ル此時恰モ一月ノ嚴寒ニ際シ山中雪ニ遇
 フテ凍死スル者半ハニ過シ人ヲ八百五十八、七年此路ヲ經テ遊
 歐死スル者見シト云フ
 コイカン清ノ猶和睦ヲ以テ主トシ且ホツロヤ、ノ騒亂却テ
 其威勢ヲ張ルノ術トナルヲ見テ漸々之ヲ輕シシ復タ、ホツ
 ロヤ監守ヲ以テ意トセス因テ千八百五十五年ヨリ同五十
 六年ノ間ホツロヤ又數カシガル恢復ヲ試ミシト雖モ邊防
 固ヲシテ入ルヲ能ハサリシカ同五十七年ニ至テ、ホツロヤ、
 ワリハン遂ニ其意ヲ達シ又入テ、カシガル、ニ據ル
 ワリハン先ツ、ヤンギサル、ヲ攻メテ之ヲ取り急ニ兵ヲ移シ

テ、カシガル漢城及ヤルケンド、ヲ圍ミ又兵ヲ分テ、ホマン及
 アシヌウ、ヲ略セシメ軍務ノ事業大ニ進ム然レモ吏治其宜
 チ得ス且ワリハン、カシガル風俗ヲ好マス土民ヲシテ皆ヨ
 一カン風ニ倣ハシム土民之ヲ嫌フ又性殘忍ニシテ誅戮ヲ
 擅ニシ多ク無辜ヲ殺シ、カシガル河岸へ人ノ首ヲ積ンテ其
 堆キヲ望ムニ至ル獨逸ノ學士アドリフ、シラ、イ、ギ、ン、フ、ウ、エ、イ
 學士ガリク、ニ至ル此時ホツニジヤ一族、ワリハン、其、國、ス、ル、其、兵
 右ノ書ヲ出サ、五十七年八月命ヲ下シテ、新ラ見シム、因テ人々危懼
 相顧ミ難チ諸方ニ避クル者亦多シ會、清ノ大軍イリ、ヨリ來
 リ進ム、カシガル、コイカン、ノ兵之ヲ聞テ皆走ル、ワリハン禁
 スルヲ能ハス、カシガル、ヲ領スルヲ僅ニ四月ニシテ亦奔
 ル、コイカン商人等之ニ繼ク此役ニ又カシガル、ヨリ、コイカ

ン地方ニ移住セシ者凡ソ一万余人
 ホツマヤ、ノ、カシガル、ヲ擾亂スル此ニ至テ既ニ四度清始テ
 決策ヲ用ヒ盡シ叛者ニ與ミセシ者ヲ誅シ邊塞ヲ固メ、コ
 カン、ヲ嚴責シテ固ク舊約ヲ守ラシム然ル宗官軍及故國恢
 復ノ名義ニ伏リシ、ホツマヤ數回ノ亂漸々既ニ清國ノ威勢
 テ挫キ、マホメツト宗ヲ奉スル土民中自立ノ威亦自ラ發シ
 テ新疆全部變亂ノ勢ヒ漸ク成ル然レ第五回ノ騷亂ハ他方
 ヨリ起ル
 千八百六十年代ニ至テ清國ノ不幸累ナリ、イギリス、フラン
 ス北京ヲ陥レ長毛賊西南ヲ擾亂ス而シテ東干亦續テ西北
 ニ起ル、ドンガン、ハ清國ノ甘肅諸州ヨリ新疆東北都ノ城邑
 中最モ多數ノ人民ニシテ皆マホメツト宗ヲ奉シテス

ドンガンノ謀叛

清國ノ領内マホメツト宗ヲ奉スル其丁壯久シク清國ノ兵役
 ニ服シテ當時新疆戍兵ノ半ハニ居レリ
 ドンガンノ事前ニ出ツ今又左ノ數説ヲ掲ケテ遺漏ヲ補
 フ
 リツタル東トルキスタン地誌ニ、メツク參詣人及ボルン
 ス、シ説ニ據リ、ドンガンノ事ヲ記シテ曰ク其故郷ハ蓋シ、
 ヤルケンド、ノ西ニ當リシ山中サラル及セイラム、ニ在リ
 右ドンガン人ノ自カラ傳フル所ハ上古アレクサンドル
 マセドニ一地ヲ略シテ、サラル及セイラム、ニ至リ此ニ一
 部ノ兵ヲ殘シテ留住セシム之ヲ其先祖トメト云フ右ハ
 本ト、トルキ語ニテ、ドンガツ或ハ、トルガン、トハ、殘リシ人
 ト云フ義ナルニ由リ多分名義上ノ推察ヨリ出テシ者ナ

ラント
クアバートツキン、ノ、カシガル誌ニ曰ク、ドンガン、ハ唐時代
ウイグル^回ヲ征シテ其人民百万餘戸ヲ内地西部ノ曠野
ニ移住セシメシ者ノ後裔ナリ右ノ、ウイグル^回新疆土民ト
交通シテ、マホメツト宗旨ヲ受ケシト雖も漢人ト接近シ
婚縁相重ナリ年ヲ經テ其風ニ化シ遂ニ、カシガリヤ地方
ノ同種族ト差別ヲ生セリ
ソスノト、フスキ、ノ説ニ此人民ノ一揆初メ陝西ノ、ドン
グワン^{或ハト}云フ城堡アル地方ヨリ起リシヲ以テ最初
謀叛ノ傳報地名ニ依リシモノ後叛民ノ稱號ニ變セシト
クヲバートツキン右ノ説ヲ難スルニ、ドンガン、ノ稱號ハ其
前既ニ存セシヲ以テシテ己ノ聞ク所ヲ傳アルニ初メ元

ノ、^テンギス汗北京ニ入りシ時東トルキスタン、ヨリ、マホ
メツト宗ヲ奉スル人々多ク其軍ニ加ハリ居テ其儘漢土
ニ残り留マリシモノナリト
明史ヲ案スルニ元ノ時回々天下ニ遍チシトアリ、ドンガ
ン亦其中ニ居リシハ知ルヘシ然レ獨リ、ドンガン、ヲ以テ
其居残りトスルハ蓋シ亦リツテ、ノ所謂名義上ノ推察
ヨリ來ルモノナリ、ドンガン、ノ回鶻タルハ甘肅以西哈密、
土爾番、哈刺沙爾、烏魯木齊邊久シク其住所タルニ由テ明
カナリ元ノ始フランズ、ノ傳教士ルイテロク亦カラシヤ
ル、ノ住民ハ、ウイグル、タルヲ見ル宋史ニ回鶻ハ匈奴ノ別
裔ニシテ初メ鐵勒後、回鶻ト稱シ甘州以西哈密、土爾番ニ
住スト見ヘ又五代史ニモ甘州ヲ以テ回鶻ノ牙トストア

リ是ニ由テ此論ヲ決スルヲ得ヘシ
 千八百六十二年一或ハ六十年トス甘州ノ、ドンガン亂ヲ爲ス是ヨリ
 先キ、ドンガン清人ト和セス其不和本ト宗旨ノ異ナル所ヨ
 リ生シテ遂ニ相仇視スルニ至ル會、兩民ノ間ニ一小事變ア
リ或ハ云フ初メ安西之城ヲ捕ヘテ、ドンガンノ衆、刀ヲ以テ相集リテ
之ヲ激成セテ遂ニドンガン乃チ其機會ニ乘シ、サウル、ト稱ス
 ル者ヲ推シテ謀主トシ宗旨軍ヲ唱ヘテ清ノ官吏ヲ殺シ其
 城邑ヲ屠ル是ニ於テ四方ノ、ドンガン皆起リ争フテ仇敵ヲ
 剪除ス其勢焰甚々熾ニシテ甘肅諸州ヨリ忽チ新疆ノ東
 北部ニ波及シ、ウルムチ、イリ、タルバガマイ、トルフワン、シウ
 チヤ諸城ノ、ドンガン前後皆起ル其戍兵タリシ者亦變シテ
 之ニ應シ土民ト力ヲ協セテ各處清人ヲ殺シ其城壘ヲ毀

ツ續ヒテ、カシガル、ヤルケンド、ホタン諸城ノ住民モ之ニ倣
 フテ遂ニ新疆全部ノ騷亂トナリ千八百六十四年ニ至テハ
 天山南北路共ニ叛民ノ手ニ歸シ内地ノ交通絶ヘ清兵殆ン
 ト盡キテ其殘餘僅ニ、カシガル、ヤンギサル、ノ兩漢城ヲ保テ
 リ

南路ノ方ハ、ソータヤ、ノ謀叛ヲ以テ始トシ各城ドンガン、
 ニ關セズ住民自ラ機會ニ乘シテ起リントモ云フ其說ニ
 千八百六十二年クウチヤ、ノ住民相集リ黑山派ノ、ホツシ
 ヤ、ナルガチヤン、ヲ推シテ長トシ清ノ兵營ヲ襲フテ之ヲ
 屠リ使テ諸城ニ遣ハシ宗旨軍ヲ唱ヘテ兵ヲ徵ス、カラシ
 ヤル、トルフワン直ニ之ニ應ス、アクスウ、カシガル、ヤルケ
 ンド、ホタン、ハ其使者ノ達セサル前既ニ自ラ起テ事ヲ成

コーカン、
ホツシヤ、
ヲ放ツ

ヤクブ

セリト然レ用各處始ハ、ドンガン事ヲ起シ其他ノ住民之
ニ應セシ説多シ
コーカン又此機會ニ乘シテ巳ノ利ヲ占メント欲シ前ニ禽
ニ就キシ、チエンキル爾格ノ子ホツシヤ、ブズルン、ニ小兵ヲ
授ケ、ヤクブベクヲ以テ其將トシ千八百六十四年ノ始メ
進シテ、カシガル、ニ入ラシム一説ニ、ホツシヤ、ブズルン、タ
シ、コーカン、カシガル、頭目、容易ニ押込スヘキ、貨居ク、ヘン、ア
チズルニ、應セシフ、王即
カシガル住民ホツシヤブズルク至ルト聞テ大ニ悦ンテ之
ヲ迎フ、ブズルン乃チ城ニ入テ、カシガル王位ニ即キ、ヤクブ
|| ベク、ヲ以テ輔佐トシ専ラ軍務ノ事ニ任セシム
ヤクブ || ベク才略アリ功名ヲ好ム此ニ至テ、カシガル王國

ベク、ガレ
ム、チ定

ノ基ヲ立テント欲シ直ニ兵ヲ募テ軍國ノ施設ニ從事ス
ヤクブ || ベク、ハ本ト、コーカン僧ノ子ナリ其僧ホツゼン
ト、ニ生レ諸方ニ流寓シ、ブスケント、ニ於テ妻ヲ娶リ一子
ヲ得タリ之ヲ、ヤクブ || ベク、トス後離縁シテ去ル妻其子
ヲ携ヘテ再ヒ同處肉屋ノ商人ニ嫁シ、ヤクブ || ベク、其家
ニ養ハル因テ之ヲ肉屋ノ子トモ稱ス、ヤクブ || ベク、幼ニ
シテ父母ヲ失ヒ身ノ倚ル所ナクシテ、バチヤ、トナル、バチ
ヤ、トハ舞童ノ義ニシテ、日本ノ藝者ノ如キ者ナリ會一ノ、
コーカン人アリ、ブスケント、ヲ過キ、ヤクブ || ベク、ヲ見テ
之ヲ愛シ携ヘテ、コーカン、ニ歸ル其美少年ニシテ舞躍ニ
巧ミナルヲ以テ一時大ニ流行シ衆人之ヲ愛シテ輾轉相
傳フ後、コーカン王近時ノ人ニ歸ス其人ホツゼント代官

ニ任セラレ之ニ隨テ其任所ニ赴シ然モ幾ハクモナクシテ内亂起リ主人亦殺サレ遂ニ又マシケント豪商ノ抱フ所トナル其中ヤクブ||ベク、ノ年齡漸々加ハリ容色才藝ヲ以テ人ヲ動カスノ時亦將サニ過キントス會、マシケント、ノ代官其妹ヲ慕フテ之ヲ娶ル、ヤクブ||ベク其縁ニ由テ代官ノ近侍トナルヲ得タリ爾來其才氣漸々著ハレ後累進シテ、アク||メチエキ、ノ代官トナル此時ロシヤ兵シルダリヤ河口ヨリ來リ侵ス、ヤクブ||ベク之ト戰フテ功アリ後チムケント邊ニ連戰シ最モ勇悍ヲ以テ著ハレ名望日ニ高ク當時有名ナル、コイカシ、ノ輔相アリム||クル、ト匹敵ノ勢威ヲ有ツニ至ル會、カシカル行ノ事アリ、ヤクブ||ベク自ラ請フテ之ニ赴キシト云フ

此時各城トシガン、ノ勢ヒ甚ク熾ンニシテ、クウチヤ、ヤルケンド、皆其手ニ在リ唯ホマノ一方ニ獨立シ清兵亦懸絶シテ、カシガル及ヤンギサル、ノ兩漢城ヲ保テリ、ヤクブ||ベク、トシガン、ノ最モ與ミシ難キヲ知リ先ツ新ニ募集ノ、カシガル兵ニ、コイカン兵五百ヲ交ヘテ一軍トシ、ブズルク、チシテ之ヲ率キテ、カシガル漢城ヲ圍ミ時ニ清兵ヲ攻撃シテ實地ノ訓練ヲ爲サシメ自ラ餘兵ヲ率キテ、ヤンギサル、ヲ略シ直ニ進ンテ、ヤルケンド、トシガン、ニ向フ然モ戰ヒ利アラズシテ退ク、ヤルケンド、トシガン、クウチヤ城長ブルガチゲン、ト計リ、ブズルク、ヲ逐ヒ出サント欲シ兩方ヨリ兵ヲ發シテ、カシガル、ニ追ル、ヤクブ||ベク少シク信任ノ兵ヲ留メテ漢城ノ清兵ヲ押ヘ自ラ精銳ヲ選ンテ、トシガン、ニ當リ先ツ、ク

ウチヤ及アグスウ、ノ兵ヲ挫キ急ニ軍ヲ廻ヘシテ、ヤルケン
 ド、ノ兵ニ向ヒ又撃テ之ヲ敗ル是ニ於テ、カシガル、ノ威勢漸
 ヲ振フ
 ヤンブ^{II}ベク、カシガル漢城ノ清兵ニ降ヲ勸ム清兵屈セス
 死ヲ決シテ其城壘ヲ保ツ因テ之ヲ攻ム清兵支フル十四
 ケ月後防禦ノ術全ク盡キ千八百六十五年春其上長官等火
 チ放チ焚死シ城遂ニ陥ル
 グリゴ^Iリエ、フ其東トルキスマン誌ニ此役ヲ記シテ曰
 ク敵兵ノ攻撃方サニ急ナリ清ノ大臣事既ニ爲ス可テサ
 ルヲ見テ士官ヲ集メテ會議ヲ開ク且己ノ子女及舉家ノ
 人ヲ呼ヒ席ニ列シテ客ニ茶ヲ進メシメ自ラ長烟管ヲ取
 リ安坐シテ烟ヲ喫ス壁内ムスリマン、ノ捷ヲ唱フル、アラ

ヤクブ^{II}
 ベク己ノ
 地位ヲ固
 ム

グ、エクベル神威大ノ聲耳ニ達スルニ及ンテ烟管ヲ打テ
 其灰ヲ坐右ニ落ヌ此處ヨリ豫メ床下ニ設ケシ地雷火ニ
 火道通セシニヨリ忽チ爆發シテ一同微塵ニ碎ケシト
 清ノ諸城皆善ク防キ戰ヒ其將士最後ニ至テハ大概皆是
 等ノ術ヲ用ヒテ焚死セシト云フ
 漢城既ニ陥リ、カシガル盡ク定マル是ニ於テ、ヤクブ^{II}ベク
 其兵ヲ東ニ移シテ、ヤルケンド、チ攻ム會キブチヤク、ノ變ア
 リ軍ヲ回ヘス
 初メ、ヤンブ^{II}ベク其王ブズルク、ノ名ヲ以テ事ヲ行フ然ル、
 ブズルク柔弱ニシテ事ニ堪ヘス、ヤクブ^{II}ベク之ヲ利トシ
 自ラ乃公ノ事ヲ爲サント欲シテ善ク將士ヲ懷ケ又漸々王
 ノ近臣ヲ遠ケ己ノ信任者ヲ以テ之ニ代ヘテ其地位ヲ固ム

ヤクブ
ベク、ヤル
ケンド、及
ホク、チ
略ス

然ハ、ヤクブ || ベク、ニ服セサル者亦多シ、キブチヤク || 此頃コ
セニ於テ威權ノ名ヲ有 黨最モ之ヲ惡ム此ニ至テ前ニ、カシガル、チ
擾亂セシ、ホツシヤ、ワリハン等ト竊ニ、ヤクブ || ベク、チ除カ
ン | 計ル然ル其事成ラス皆ヤクブ || ベク、ノ罰スル所ト
ナル
ヤクブ || ベク 既ニ内亂ヲ定メ先ツ、マラルバシ堡ヲ襲フテ
之ヲ取り、シウチヤ及ヤルケンド、ノ交通ヲ斷チ三、ダヒ、ヤル
ケンド、チ攻メテ迷ニ之ヲ取り又進ンテ、ホク、ニ逼ル此時
ホク、ハ、ハビブラク、ト稱スル老人ヲ推シテ城長トシ住民
一致シテ四境善ク治マル、ヤクブ || ベク 其力ヲ以テ取り
難キチ知り詐術ヲ設ケ、ハビブラク、チ招キ出シテ之ヲ殺シ
其印ヲ利用シ住民ヲシテ城門ヲ開カシメ遂ニ之ヲ押領ス

ヤクブ
ベク自立
ス

一 僞説ニ、ヤクブ || ベク 城始メ、ハビ
奇兵ヲ出シテ防キハシメ、ハビ
住民ニ其性命ヲ保ク || 然ルニ、
無異ニ其妻妾相謀 || 然ルニ、
シ 殺ス者因テ其報ヒ || 然ルニ、
右ハ皆千八百六十六年ヨリ同六十七年間ノ事タリ其間葱
嶺山上ノ、サルイクル及ブル | 等亦皆ヤクブ || ベク、ニ歸
服ス、ヤクブ || ベク 此ニ至テ其地位既ニ成ルチ知リ、カシガ
ル王ブズルク、ニ勸ンテ、メツク、ニ參詣セシメ千八百六十七
年人民ヲシテ己レチ推サシメテ遂ニカシガル王位ニ即キ、
アタリク || ガシ、ト號シテ國政ヲ行フニ右ノ稱ハ、ア、カ、
王ノ贈リナリモ、其情ニ、アタリク、ニハ叔父ガ、
討者ノ贈リナリモ、其情ニ、アタリク、ニハ叔父ガ、
之ヲ殺ル稱叔父シタル名號ヲ以テ

ヤクブ
ベク、クウ
チヤ及カ
ラシヤル
チ略ス

ヤクブ
ベク、トル
フワン及
ウルムチ
チ略ス

此時ブルガチヤン、クウチヤ、ニ據リ、アクスウ以東皆其命ヲ奉セリ同年夏ヤクブ東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリベク進ンテ、アクスウ、チ徇ヘ直ニ、クウチヤ、ニ向フ、ブルガチヤン、遼ヘ戰フ、ヤクブ東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリベク撃テ之ヲ敗ル、クウチヤ、クルラ、カラシヤル、ノ諸城戰ハスシテ皆降ル是ニ於テ、ドンガン、ト界チ、カラシヤル、ノ東十二三里ノ處ニ畫シテ、カシガル、ニ還ル東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリル河源ニ出カシガル、ヨリ六日程ノ處ニ野堡ヲ構東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリドンガン、ヤクブ東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリベク、ノ勢ヒ益盛ナルヲ見テ早ク其失地ヲ復セント欲シ千八百六十九年ウルムチ及トルフワン、ヨリ七八千ノ兵ヲ發シテ、クウチヤ、ニ向ヒ、カシガル、ノ戍兵ヲ撃テ之ヲ走ラシ又進ンテ、クウチヤ、ヲ扼ス、ヤクブ東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリベク警ヲ聞テ直ニ之ニ赴キ連戰シテ、ドンガン、ノ兵ヲ敗リ、クウ

チヤ、ヲ復シ勝ニ乘シテ、クルラ、ニ至リ、コルツース地方ノ、トルゴウト及リヤンシヤン南ニ北路ノチ保チシ清兵ヲ招撫ス千八百七十年ノ始メ進ンテ、トルフワン、ヲ攻ム然ル其守備甚ク固フシテ拔ケス因テ長圍ヲ設ケ糧道ヲ斷テ之ヲ困マシムル東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリ八月城遂ニ降ル此時ハミ、ノ住民亦ドンガン、チ離レ前ノ、ハキムベク、ノ妻ヲ奉シテ領主トシ兵ヲ以テ、ヤクブ東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリベク、ヲ助クヤクブ東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリベク此舉ニ乘シ、ドンガン、ノ巢窟ヲ覆ヘサント欲シテ遂ニ、ウルムチ、ニ向フ、ドンガン、カラチ傾ケテ之ヲ拒ク兩軍大ニ、ウルムチ谷間ニ戰フ、ドンガン、又敗走ス後勢ヒ敵スヘカラサルチ知リ遂ニ、ウルムチ、ヲ以テ降ル、ヤクブ東シヨウノ説ニ此時ヤクブ兵ナリベク乃チ、ドンガン中勢威アリ且己ニ心服セシ者ヲ立テ、ハキム

ハク、トシ盡ク山北ノ諸城ヲ管セム、ニ、カラバア
シ時、清國ノ奔テ、ヤイクブン、成ハ、ク、ニヤ
ガシ、ルテ、軍ニ、共從、ハ、シ、ム、フ、シ、ウ、シ、ヤ
發、ウ、ル、メ、チ、ニ、自、ラ、進、ム、ニ、ニ、及、ク、シ、ウ、シ、ヤ
ク、之、取、ヲ、立、積、テ、進、ム、其、地、方、北、路、官、ノ、諸、城、ヲ、略、シ、マ、ノ、ナ、ス、ニ、至、ル、セ、シ、ク、ム、後、
ニ、ヤ、ク、ム、シ、ベ、ク、ウ、ク、シ、ノ、ヤ、待、遇、漸、々、之、ヲ、簿、忍、ミ、遂、ニ、其、他、人、ヲ、以、テ、シ、ウ、シ、ヤ、ク、ム、後、
兵、ト、ハ、千、ノ、領、ゴ、シ、テ、シ、ノ、シ、ク、ム、フ、ノ、東、ガ、ト、ル、ノ、諸、城、ヲ、以、テ、シ、ウ、シ、ヤ、ク、ム、後、
ウ、串、ル、ニ、就、テ、ハ、役、唯、大、ニ、ク、與、リ、テ、功、ア、リ、シ、ト、見、ヘ、フ、シ、ウ、シ、ヤ、ク、ム、後、
ガ、ン、ニ、歸、セ、シ、清、國、新、疆、ノ、土、地、此、ニ、至、テ、其、半、大、既、ニ、ヤ、ク、ム、後、
||ベク、ノ、押、領、ス、ル、所、ト、ナ、ム
ヤ、ク、ム、||ベク、ウ、ル、ム、チ、ニ、留、ル、コ、ト、二十、日、ニ、シ、テ、軍、ヲ、旋、ヘ、シ
歸、路、ト、ル、フ、ワ、ン、及、カ、ラ、シ、ヤ、ル、ニ、留、リ、各、其、城、壁、ヲ、修、メ、テ、守

伊犁ノ騷亂

備チ固フス翌年春アクスウ、ニ達シ治府ヲ此ニ移シテ、イリ
地方ノ動靜ヲ伺フ
此間イリ地方モ始メ、ドンガン起リ、ダランチ及キルギース
之ヲ助ケテ清ノ諸城ヲ屠ル千八百六十三年夏惠遠城亦陷
リ全地方盡ク、ドンガン、ノ、手、ニ、歸、ス、後、ドンガン、ダランチ、ト
争フテ與ニ戰ヒ、遂ニ、ダランチ、ノ、勝、ニ、決、ス、千、八、百、六、十、九、年
ダランチ、ノ、酋、長、ア、ブ、ド、ラ、王、位、ニ、即、キ、盡、ク、イ、リ、地、方、ヲ、領、ス、
イリ地方ハ西カザク、或ハ、キルギース曠野ニ接シテ其境界
定ヲサリシト雖モ清國ニ於テハ初メ此地方ヲ平定セシ時
キルギース亦服屬セシチ以テ、イリ河左右ノ土地ハ其下流
ニ至ルマテ一面皆其所領ト算ヘリ然ルニ千八百四十年代
ノ末ロシア兵シベリヤ、ヨリ、キルギース、ヲ、制、馭、シ、テ、漸、々、南

ロシア兵
伊犁ヲ扼ス

年カヲテ軍備ニ傾ク頻リニ武器ヲ製シ兵數ヲ増ス因テ費用辨セズ租稅自ヲ重ク國力益疲弊シ人民亦怨ムニ至ル此間清國ニ於テモ内外ノ亂漸ク治マリ新疆恢復ノ事ニモ着手セシト雖而戰ヒ常ニ利アラヌシテ諸將其功ヲ奏スルヲ能ハサリシニ千八百六十八年左宗棠陝甘ノ總督トナリ兵器ヲ整ヘ賞罰ヲ嚴ニシテ自ラ陣ニ臨ミシ以來叛民征討ノ功漸々著ハル其日々寸地ヲ占メ年々尺土ヲ獲ル方略ニ由テ徐々ト進ミ十年間兵ヲ用ヒテ遂ニ新疆ヲ恢復セシ委細ノ事ハ未ダ詳ナラスト雖而千八百七十六年ノ末ニハ、ハミ、ヨリ西北ノ土地天山北路ノ諸城ハ、イリ、ヲ除クノ外皆既ニ清兵ノ復スル所トナリ唯トルフワン以西猶ヤクヅベク、ニ屬シ清兵ウルムチニ據リ、カシガル兵トルフワン、ニ據

リ兩軍ノ先鋒天山南北路分界ノ山ヲ隔テ相對陣シテ冬ヲ過セシト云フ然ルニ當時ヤクヅベク、ノ軍氣既ニ沮喪シテ逃亡スル者相繼キ其兵勢次第ニ衰フ明年春清兵進ミ撃ツ、ヤクヅベク、之ニ抗スル能ハス前後奮戰シテ皆敗レ事既ニ爲ス可ラサルヲ見テ遂ニ藥ヲ仰テ死ス或ハ叛臣ノ殺ス所トナリシトモ云フ是ニ於テ、カシガル、ノ兵皆潰ヘ諸城相隨テ降り千八百七十八年ニ至テ天山南路亦盡ク清國ノ平定スル所トナル
最後新疆騷亂ノ始末ニハ區々ノ說アリ其實未ダ詳ナラサル者多シ故ニ右ノ概略ヲ以テ新疆略史ノ終トス

イリ占領
ニ、就、
ロシヤ、ノ
答辨

伊犁論

初メ、ロシヤ、ノ伊犁ヲ扼スルヤ十千一八百七清國直ニ、ロシヤニ、
懸合フテ其説明ヲ要セシニ、ロシヤ政府ハ清國ノ威令此地
方ニ及ハス之カ爲メニ平生約束ノ商賈保護モ行ハレサリ
シノヨナラヌ、イリ、ノ、キルギス屬邊境ヲ侵掠セシニヨリ
己ムチ得ヌジテ之ヲ扼セリ然レロシヤ、ニ於テ本ト土地ヲ
兼併スルノ意ナシ故ニ清國ノ威令彼地方ニ復シ將來國境
ノ安全ヲ保ツテ得ル時ニ至テハ之ヲ返還スヘシト答ヘタ
リ
此時新疆各地叛民ノ勢ヒ猶強ク清國ニ於テハ未タ之ヲ鎮
定スルニ暇アラザリシカ右ノ返答ヲ得テ之ヲ公證シテ
認メ銳意恢復ニ從事セリ後イリ近傍ノ土地漸々定マラルニ

及メテ清國ノ總督出先ニ於テ屢、ロシヤ兵ニ、イリ、ヨリ退ク
 ヘキヲ要セシト雖モ、ロシヤ兵ハ本國政府ノ命ナシトテ之
 共應セズ依然イリ、ニ據テ清兵ノ、ヤクブニ、ト交戦ノ結
 局ヲ傍觀セリ然ルニ後、清國、遂ニ、ヤクブニ、ト制シテ天
 山南路ヲ平定ス此時ロシヤ、ハ、トルコ論ニ因テ頗ル多事ヲ
 リ清國乃チ其機會ニ乗シテ、ロシヤ政府ニ懇合ヒ千八百七
 十一年ノ約束ニ憑リ、イリ返還ノヲ要求セシニ、ロシヤ之
 ニ答ヘテ曰ク若シ北京政府ニ於テ將來國境ノ安全ヲ保護
 シ且ロシヤ、ニ於テ多年イリ、ノ吏治ニ充テシ費用ヲ償ハ、
 其意ニ應ズニシト因テ清國ニ於テ其大臣崇厚ヲ全權大使
 ニ任シ千八百七十八年ロシヤ、ニ派シテ前度懇合ヒノ趣意
 ニ基キ、イリ返還ノ約束ヲ定メシム

リフヂ、ヤ
 假條約

清國ノ全權大使崇厚ニトルブルグ、ニ駐リ長ク、ロシヤ政
 府ト商議セシ後千八百七十九年秋ワウヂ、ヤ（黒海ノ北岸ニ在ル、ロシヤ帝
 宮ノ離ニ於テ遂ニ假條約ヲ定ム其大略左ノ如シ）聞紙時各國新
 所シ

- 第一 俄シヤ、イリ地方ヲ返還スル事
- 第二 清國イリ地方叛民ノ罪ヲ赦ス事
- 第三 イリ地方ヨリ、ロシヤ領内ニ移往スル人々ハ、ロシヤ人同等ノ待遇ヲ受ケ同等ノ權利ヲ有スル事
- 第四 イリ地方ニ在ル、ロシヤ人ノ財産ハ永ク、ロシヤ人ニ屬スル事
- 第五 清國ヨリ左宗棠ロシヤ、ヨリ、カウ、フマン、ヲ特派シテ、イリ地方授受ノ手續ヲ爲サシムル事

第六 イリ地方返還ニ就キ清國ハ此條約交換ノ日ヨリ一年ノ間ニ、ロシヤ、ニ五百万ルーブル、ノ償金ヲ拂フ事

第七 イリ地方返還ニ就キ清國ハ、コクスウ河以西犁山ウズンヲ以南テケス河上流兩岸ノ土地ヲ、ロシヤ、ニ讓ル事

第八 ヌルハガタハ條約ニ定メシ、ザイサン湖方面ノ國境ヲ改正スル事

第九 特派委員國境ヲ改正セシ後界牌ヲ建ツル事

第十 ロシヤ、ニ於テ、イリ、ヌルハガタ、イ、カシガル、ウルガ、庫、外、新、嘉、峪、關、及、ト、ル、フ、穴、ン、ニ、其、領、事、官、ヲ、設、ク、ル、ヲ、得、ル、事

第十一 ロシヤ、ノ領事清國ノ地方官ト事體ノ緊要ナル照會ヲ爲スルハ公文ヲ用ヒ彼是友邦官員ノ禮ヲ以テ相待ツ事

第十二 ロシヤ商民ハ舊來蒙古地方ニ於テ無税ニ貿易スルト同シ天山南北路ノ諸城ニ於テモ免稅ノ事

第十三 ロシヤ商民ハ其領事官ナル地方及張家口ニ貨庫ヲ建築スルヲ得ル事

第十四 ロシヤ商民ハ張家口通州ヲ經テ天津ニ赴キ或ハ天津ヨリ他港及内地ノ諸城ニ往テ貨物ヲ販賣シ又此路ニ由テ貨物ヲ、ロシヤ、ニ運送スルヲ得ル事

第十五 批准後五年以内ニ此條約ヲ改正セサル事

第十六 清國總理衙門ハ、ロシヤ商民ヨリ租茶ノ課税一

條ニ就キ申出シ事ヲ可決スル事

第十七 若シ界ヲ越ヘテ牲畜ヲ盜ム者アルハ清國及

ロシヤノ地方官ハ舊約ニ依リ各其犯民ヲシテ原

物或ハ代價ヲ以テ返償セシムヘシ然レモ互ニ自ラ

之ヲ償ハサル事

第十八 此條約本書ハ批准ノ後一年ヲ期シ、ベイトルツ

右ノ假條約中兩國ノ關係最モ大ナリシハ第七條テケス河

谷間ノ土地ヲ授受ニ在リシカ右ハ、ロシヤニ於テ、イリ地方

ヲ返還スルニ就キ其土民中猶ロシヤノ管轄ヲ望ム人々ヲ

移住セシムル爲メ必要トシテ請求ニ出シモノアリ抑、此テケ

ス河谷間ハ非常ノ沃土ニシテ耕作ニ便ナルハ勿論南北ノ

山野ニハ樹木繁茂シテ材木ニ富ミ至ル所草肥ハ水甘ク最

モ饒カナル、キルキス、ソ牧場トス故ニ、ロシヤ此地ヲ得ハ、

不列住民ヲ移殖セシムルノ容易ナルハ勿論右ノ游牧民ト

與シ、其版圖ニ入ルヲ以テ直ニ其慕稅ヲ收ムルヲ得ヘシ而

シテ他日此土地開クニ及ンテハ、イシクハ湖方面ニ

散布セシ殖民地ヲ連絡相通シ此ヨリ、ムザルト越ニ由リ天

山南路ヲ諸城ヲ通商ノ路開ケ得ル亦期スヘクシテ經濟上

大ナル利益ヲ及ムザルト山路ヲ扼スルニ至テハ、イリ及

カシガル、ノ兩地方ヲ隔テ何レノ方ニ向テモ進取ノ利アリ

軍務上亦大ナル利益アリ然レ一方ノ利益ハ他方ノ損失ナ

再度ノ談判

ルニヨリ清國ニ於テモ善ク此地得失ノ利害ヲ知リ大使崇厚初メヨリ之ヲ争フテ其事談判ノ論點タリシト雖モ、ロシヤ讓ヲス逐ニ其利益ニ決セシト云フ然ルニ大使崇厚復命スルニ及シテ清國ニ於テ物議速カキ起リ獨リ右ノ條約ヲ決定セザリシノミナラス大使崇厚其權限ヲ超ヘシモノトシテ之ヲ獄ニ下シ、ロシヤ、ニ向テ不服ヲ唱ヘ兩國和親ノ交際途ニ變シテ敵視ノ勢ヒトナリ互ニ軍備ニ着手シテ各兵ヲ其國境ニ集メ千八百八十年春ヨリ夏秋ノ際兩國和親ノ決世論ノ問題タリ然レ後和談復タ始マリ其秋清國更ニ曹紀澤ヲ公使トシテ新ニ、ロシヤ、ニ派ス公使曹紀澤ハ、トルグ、ニ着シテ再度ノ談判始マル此時發起ノ難問ハ清國ニ於テハ全ク前ノ、リウヂヤ、條約ヲ廢

結

以テ新ニ事ヲ議セント欲シ、ロシヤ、ニ於テハ惟其條約ニ基ヒテ議スルシトスルニ在リシニ清國遂ニ一歩ヲ讓リ、ロシヤ、條約ニ基ヒテ更ニ商議セシ後ロシヤ亦少シク讓リ前假約第七條ニ定メシ、アケス河谷間ヲ、イリ河岸ホルゴイス河以西ノ土地ニ代ヘ第六條ノ五百萬ヲ九百萬ト改メ外ニ黑龍江、松花江、烏蘇里河ノ行船及ヒ右諸河水沿岸ノ貿易ニ關セシ箇條ヲ加ヘテ和約遂ニ諧ヘリ其委細ハ下ニ載スル所ノ新條約ニ就テ之ヲ觀ルヘシ右ノ次第二テ伊犁論ト與ニ多年兩國間交際ノ煩ヒトナリ居シ通商及境界論モ一時ニ決シテ其鄰好遂ニ舊ニ復セリ將來ノ事固ヨリ測リ難シ然レモ若シ他年新疆復タ亂レ清國ニ於テ其國境ヲ保護スル能ハサル事アルニ至テハ或ハ

イリ論再ビ起リ勢力相推シ其復タ、ロシヤ領ニ歸スルヲア
ル未ダ知ルヘカラス何トナレハ、ロシヤ、ノ、イリ地方ヲ領セ
シテ殆ンド十年既ニ吏治ノ經驗アリ亦土地ノ租稅以テ其
費用ヲ償フニ足ルヲ知ル又其新ニ國境ヲ畫セシ、ホルゴ
ス、ニリ、ク、リ、ツ、ヤ、マ、テ、僅ニ二十六里ニ過キス（舊境ノ、ボ、ロ、
、ノ、凡、ソ、ト、四、里、且平坦ナル車道ニシテ一モ進取ノ障礙ト
ナラズ所ナシ然則天山南路及北路中イリ外ノ地方ニ至テハ
高山重峯之ヲ隔テ土地ノ狀態人民ノ氣風亦イリ、ト同シカ
ラズナリ以テ之ヲ取ルニ既ニ難シ又假令ヒ之ヲ取ルモ得
失相償ハサルコト多クテ故ニ若シ清國吏治ノ根本固ク定
マリ土民制馭ノ法善ク整理スルニ至ラハ外寇ノ虞ナシト
謂テ可ナリ

實ニ、ロシヤ、ニ於テモ清國トハ二百餘年來ノ鄰好アリ且通
商ノ利重ク政略上ノ關係亦大ナルヲ以テ之ト不和ヲ生ス
ルハ其甚好マサル所ナリ方今兩國間各處通商ノ利益ハ詳
ナラスト雖田一ス漢日ニ於テ、ロシヤ、ノ茶ノ商賣額年々三
千萬トル、ニ及ナニ由テ經濟上關係ノ大ナルヲ知ルベシ
ト、昔年、一、年、茶、輸入、額、十、萬、八、千、八、百、七、十、九、年、五、千、九、百、二、
十、年、五、千、七、百、七、十、年、七、萬、八、千、九、百、年、六、萬、七、千、九、百、年、
一、萬、八、千、年、五、千、七、百、年、七、萬、八、千、年、六、萬、七、千、九、百、年、
シ數千里ニ綿亘シ國境ヲ保護セサルヲ得サルニ至テハ
兵備又費用ト通商中絶トス損失ハ莫大ナルモノニシテ假
令ハ戰ヒ勝テ後、幾部ノ荒蕪地ヲ得ルトモ其失償ト難シ況
ヤ新ニ兼併ノ土地吏治常ニ難クシテ多ク費用ヲ要シ得失
容易ニ相償ハサルヲヤ又其政略上ヨリ之ヲ言ヘハ經濟ノ

利自ヲ其方向ヲ定ムルハ勿論若シ、ロシヤ、ノ勅敵ハ、イギリス、
ス、ニ在リ且其之ト衡争ノ極意ハ、インド、ニ在ルモノトシ又
他日ニプロツパ諸邦同盟シテ、ロシヤ、ニ抗スル猶クリメ、ノ
戦争又ハ近ク、スルリシ會議ノ如キ事アルモノトセハ、ロシ
ヤ、ニ於テ清國同盟ノ責キハ猶一ノ地理上ヨリ推テ之ヲ知
ルベシ又假令、ハ事此ニ至ラストモ若シ、ロシヤ清國ノ同盟
ヲ得事アルニ當テ一方ハ自ラ中アシヤ、ヨリ進ミ一方ハ清
國ヲシテ其威勢ヲ、サベツト地方ヨリ、インド、ノ背ニ及ホサ
シムルヲ得ルニ至ラカ、イギリス、ヨリ領ソ危急言フヘカ
ラス、ハ固ヨリ唯、ロシヤ、ノ東方ニ於ケル前途ノ一案ニシテ近
ク期ヌ可ノ事ニモ非スト雖モ何レニシテモ、ロシヤ、ノ清國

ト親密ナル隣好ヲ保ムハ向後最モ必要ナリトス故ニ其清
國トノ交際ハ重ニスルハ人ノ思想ニ過タルモノナリ
ロシヤ、ノ、スシヤ地方ニ其領地ヲ廣ムルヲ見テ、ロシヤ東使
ノ意アリ遂ニ清國ヲ併セテ後已マストノ説夫爲ス者アリ
其説固ヨリ、ロシヤ、ニ四億餘ノ人口アル他國ヲ羈縻スル術
アルヤ否モ善ク思ハサル空想ニ出ルモノトシテ姑ク之ヲ
闕キ其領地ヲ廣ムルヲ旨ヘハ右ハ、ロシヤ本ト其領分ノ廣
メタル、地方ニ接シテ廣ムル機會アリ之ニ乗セシモノニ
過キス即チ黒龍江及烏蘇里地方ノ兼併ノ如キモ其間兩國
ノ境界確定セス且清國ノ威令其所領トセシ地方ニ及ハサ
リシニ始マリ、ロシヤ、ニ於テ清國ノ、イギリス、フランス、ト不
幸ノ戦争機會ニ乗シテ成リシモノトス、イリ地方モ略、同一

シ事タリシハ前既ニ之ヲ見タリ右ハ皆一ノ機會ノ事ニシ
 テ畢竟ロシヤハニ於テ清國ノ之ヲ力爭セサルヲ知ルニ因ルハ
 メリ地方ニ至テハ其必ス力爭スベキヲ知リシ故ニ之ヲ還
 シテ其所望ヲテケヌ河上流ノ一部ニ限リシモ清國ノ抵抗
 意外ニ出シニヨリ海陸兵ヲ出シテ其國境ニ臨マシメ大ニ
 威勢ヲ張テ一步モ讓ラサル決意ヲ示シタルハ蓋シ、エツ
 ツハ人ノ所謂アシヤ人民トシテ交際ハ唯威嚴以テ之ヲ持ス
 トシトソ方略或ハ隣好ニ漸ソ策ニシテ略取趣意ニ出シモ
 ノニ非サルナリ然レ近世エフロツハ諸國中外地占領ノ事
 ニ汲々タルモノアリ經濟或ハ軍務上取テ利アリ取テル
 地處アレハ之ヲ攫ムヲ以テ風トス故ニ凡ソ物ニ利アリ人
 ノ寄貨トスルノ土地ハ守備ノ實ナケレハ危シ豈ニ獨リ清

國ノシナラシヤ

中アシヤ紀事第四編終

聞見餘錄

明治十三年八月十八日七月下旬余ペートルブルグ、ヲ發シテ中
アシヤ、ニ赴ク此時伊犁ノ爭論ニ就キ、ロシヤ、ノ方ハ海陸出
兵最中ニシテ海軍提督レンソー、フスキー、ハ其兩三日前提既ニ
出發シ清國新任ノ公使曹紀澤ハ近日來着スヘキ豫定ナリ
トテ、ロシヤ、ノ外務省ハ之ヲ待テリ八月下旬余タシケント、
ニ着シ事情ヲ偵察スルニ總督カ、ウ、フマン、ハ、アライ、山ニ出
陣セシ兵ヲ閱シテ其前日當地ニ歸リ、イリ論ノ談判ハ未ダ
定ラストノ事ナリ爾來余東南ノ諸方ヲ經過シ最後ニ、イリ、
ヨリ、ボロホロ嶺ヲ逾ヘテ清國領ノ精河城ニ出テ兩方出先
ノ兵營ヲ巡廻セシニヨリ其間兵事ニ關シテ見聞セシ所ノ
大略ヲ記スルヲ左ノ如シ

當時ロシア、ノ方ハ、トルキスタン道ノ總督陸軍大將カ、ウ、フ
 マン全軍ヲ總ヘ之ヲニツニ分ケテ諸方ヨリ清國新疆ノ境
 ヒニ臨メリ其一ハ、アライ軍ト稱シテ、コーカン、ノ東チシ、ユ
 リ、カンガル、ニ向テ、アライ山谷ニ出陣ス其兵凡ソ八千中將
 アブラーモフ之ヲ將タリ一ハ、イリ軍ト稱シテ、イリ地方ヨ
 リ出ナリソ、ムザルト及東北ボロホロ山中ニ分陣ス其兵一
 萬二三千中將カルバコー、フスキー之ヲ將タリ右ノ中ナリ
 ソ、ノ兵ハ、ナリソ河邊ノ、ナリソ城ニ據テ、カンガル、ニ向ヒ、ム
 ザルト、ノ兵ハ、アクスウ、ニ向ヒ、ボロホロ山中ノ兵ハ精河城
 及マナス地方ニ向テ陣セリ外ニ西シヘリヤ、ヨリ少將、プロ
 ツエニコ一軍ヲ率キ、ザイサン堡ニ陣シテ、タルバガイ、ニ
 備ヘタリ右諸方ノ兵豫備軍トモニ總計三萬四千トノ事

ナリ
 イリ軍ノ中イリ、ノ東北ニ陣セシ諸隊出先ノ景況ハ凡ソ兵
 營ハ各方面山路近傍ノ村落ニ散布シ其先鋒ハ一小隊位ツ
 、一日或ハ二日程ヲ先發シ山中最後ノ峠ヲ越ヘ假住ニ便
 ナル處ニ就テ木ヲ伐リ石ヲ疊ンテ兵營ヲ結ヒ其近傍通路
 ノ要衝ニ缺石ヲ以テ厚サ四五尺高サ略之ト同シキ壁ヲ二
 三重並ヘ築キ且谷間開ケテ向フヨリ狙撃又ハ馳突ニ便ナ
 ル處ニハ藜木ヲ布キ重子ヲ通行ヲ妨ケタリ又此處ヨリ凡
 ソ半日程ノ前ニ斥候騎兵十二三人出テ或ハ土ヲ盛り或ハ
 柴ヲ結ヒ假小屋ヲ設ケテ番シ其中ヨリ一二人常ニ近傍ノ
 高地ニ登リ望遠鏡ヲ持シテ時々四方ヲ瞭望セリ
 清國ノ方ハ左宗棠哈密ニ在リ南北路ヲ鎮定セシ四萬ノ兵

ト其他二萬ノ兵是春内地ヨリ來着シ都合六萬餘ノ兵ヲ領
 スルトノ事タリ然レイリ、ヨリ精河城マテハ別ニ備ヲ設ケ
 ス唯精河城ニ三四千ノ兵アリ其兵尋常ノ土壁中ニ構ヘシ
 營所ニ分屯シテ此ヨリ十四五人或ハ廿人内外ノ斥候兵ヲ
 出シテ四方ヲ巡廻セシメシノ故コ、ロシヤ兵線ヲ出テ清
 國ノ境内ニ入りシハ、ロシヤ兵ハ誰ヲ相手ニ此ノ如ク嚴
 ニ構ヘシヤト思ハサルヲ得サリシ然レハ精河城ヨリ東ノ
 方クルカタ、ウス及マナス邊ニハ萬餘ノ清兵アリ城堡ノ設
 亦稍嚴重ナリトモ聞ケリ
 精河城ニ滯在中一日清兵營ヲ出ツト聞キ往テ之ヲ見シコ
 其兵凡ソ千餘隊ヲ整ヘ旗ヲ翻ヘシテ行キ城東十四五町ノ
 處ニ至テ止マリ始メ路ノ左右ニ並列シ後分散シテ曠野ニ

斥候兵

休息セリ右ハ是日來着ノ要官ヲ迎ヘシモノト云フ其兵半
 ハ長槍ヲ携ヘ半ハ火繩銃ト雷管製ノ短銃ヲ持セリ余其中
 ニ入り清國ノ士官等ト話シ此地方兵卒所有ノ武器ハ皆之
 ト同シキヤト尋ネシニ此ヨリ以東ノ兵多クハ本込ノ銃ヲ
 備ヘルト答ヘタリ後マナス地方ヨリ還リ來リシ、ロシヤノ
 一士官唯左宗棠ノ親兵ノミ本込銃ヲ持スルヲ見シト話セ
 シカ其親兵ハ姑ク聞キ是等ノ武器ヲ以テ、ロシヤノ、ベルダ
 ン銃ト抗戦スルノ不利ナルハ清人自ラ之ヲ知ラサルヲ得
 ス故ニ之ヲ見テ其兵勢ヲ張ルハ彌一ノ虛喝ニ過キサルト
 信セリ
 兩方出先ニ於テ斥候兵等ノ親睦ニ交際セシ情況ハ左ノ一
 事ニ由テ知ルヘシ

二百三十一
余精河城ヨリ、イリ、ニ還ル途中ロシヤ兵ノ斥候番所ニ休息
シ番兵ニ向テ新聞ヲ問ヒシニ今朝清國人七八名ノ來客ア
リシヲ話セリ其客トハ清國ノ斥候兵ノ事ニテ彼等時々
巡廻シ來ルトノ事アリシニヨリ余之ヲ奇トシ精河城産ノ
燒酎等ヲ進メテ委シク其客ノ來リシ時ノ待遇方ヲ聞クニ
毎ニ茶ヲ煮テ之ヲ饗シ共ニ遊フト云ヒ、ロシヤ兵固有ノ澹
泊ヲ以テ各自今朝遊戯ノ事ヲ話ス甲兵士ノ曰ク余以爲ラ
ク清人ノ携ヘタル鏽朽ノ小銃何ノ用チカ之レ爲サント試
ニ一發ヲ求メシニ善シト稱シテ之ヲ與ヘタリ因テ薪木ヲ
縛シタル細蔓ヲ狙フテ之ヲ射シニ距離ハ近カ、リシト雖
モ其ノ善ク中リシヲ意外ニ出始テ侮ル可カラサルヲ知レ
リト乙ノ曰ク余ハ清人軀幹ノ小ナルヲ見テ體量輕カルヘ

二百三十一
シト爲シ彼ニ向テ云フ余カカラ一時ニ諸君二人ヲ扛クル
ヲ得ヘシト彼笑テ能ハサルヘシト云フ乃チ試ニ兩手各一
人ヲ抱キ之ヲ扛ケント欲スルニ果シテ重クシテ扛クルヲ
得サリシニ因リ遺憾ニ堪ヘス更ニ二人ヲ重立シシメ兩手
ヲ以テ併セテ其腰下ヲ抱キ全力ヲ出シテ之ヲ扛クルニ今
度ハ四足共ニ容易ニ地上ヲ離レタリ然レモ其一人俄ニ苦
痛ヲ呼フヲ以テ驚イテ之ヲ卸シタルニ實ハ何ノ苦痛モナ
カリシト余是等ノ雜談ヲ聞キツ、休憩ノ時ヲ過コシ出發
スルニ臨ミ馬上忽チ思ヒ得テ問フテ曰ク諸君ノ清人ト話
スル果シテ何語ヲ用ヒシヤト、ロシヤ兵相顧ミテ應ヘス暫
クアリテ其一人決セリ曰ク僕等談話スルヲ得ス唯手勢ヲ
以テ意ヲ通シ互ニ默會セシノミト兵卒ノ外交簡朴亦甚シ

失笑シテ歸路ニ就ケリ

1881年

附錄

光緒七年中俄改訂條約

大清國大皇帝大俄國大皇帝願將兩國邊界及通商等事於兩國有益者商定妥協以固和好是以特派全權大臣會同商定大清國欽差出使俄國全權大臣一等毅勇侯會同商差部政大參議大理總管外部大臣薩那爾圖布兩國全權大臣各將所奉全權諭旨互相校閱後議定條約如左

第一條

大俄國大皇帝允將一千八百七十一年即同治十年俄兵代収伊犁地方交還大清國管屬其伊犁西邊按照此約第七條所定界址應下歸俄國管屬

第二條

大清國大皇帝允降諭旨將伊犁擾亂時及平靖後該處居民所為不是無分民教均免究治免追財產中國官員於交收伊犁以前遵照大清國大皇帝恩旨出示曉諭伊犁居民

第三條

伊犁居民或願仍居原處為中國民或願遷居俄國入俄國籍者均聽其便應於交收伊犁以前詢明其願遷居俄國者自交收伊犁之日起予一年限期遷居携帶財物中國官並不攔阻

第四條

俄國人在伊犁地方置有田地者交收伊犁後仍准照舊營業其伊犁居民交收伊犁之時入俄國籍者不得援此條之例俄國人田地咸豐元年伊犁通商章程第十三條所定貿易圍

以外者應照中國人民一體完納稅餉

第五條

兩國特派大臣一面交還伊犁一面接收伊犁並遵照約內關繫交收各事宜在伊犁城會齊辦理施行該大臣遵照督辦交收伊犁事宜之陝甘總督與土耳其斯坦總督商定次序開辦陝甘總督奉到大清國大皇帝批准條約將通行之事派委委員前往塔什干城知照土耳其斯坦總督自該員到塔什干城之日起於三個月內應將交收伊犁之事辦竣能於先期辦竣亦可

第六條

大清國大皇帝允將大俄國自同治十年代收守伊犁所需兵費並所有前此在中國境內被搶受虧俄商及被害俄民家

屬各案補卹之款共銀盧布九百萬圓上歸還俄國自換約之日起按此約所附專條內載辦法次序二年歸完

第七條

伊犁西邊地方應歸俄國管屬以便因入俄籍而棄田地之民在彼安置中國之伊犁地方與俄國地方交界自別珍島山順霍爾果斯河至該河入伊犁河匯流處上再過伊犁河往南至烏宗島山廓里扎特村東邊自此處往南順同治三年塔城界約所定舊界

第八條

同治三年塔城界約所定齊桑湖迤東之界查有不妥之處應由兩國特派大臣會同勘改以歸妥協並將兩國所屬之哈薩克分別清楚至分界辦法應自奎峒山過黑伊爾特什河至薩

烏爾嶺畫一直線由分界大臣就此直線與舊界之間酌定新界

第九條

以上第七第八兩條所定兩國交界地方及從前未立界牌之交界各處應由兩國特派大員安設界牌該大員等會齊地方時日由兩國商議酌定俄國所屬之費爾干省與中國喀什噶爾西邊交界地方亦由兩國特派大員前往查勘照兩國現管之界勘定安設界牌

第十條

俄國照舊約在伊犁塔爾巴哈台喀什噶爾庫倫設立領事官外亦准在肅州嘉峪關及吐魯番兩城設立領事其餘如科布多烏里雅蘇台哈密烏魯木齊古城五處俟商務興旺始由兩國

陸續商議添設俄國在蕭州、綏遠及吐魯番所設領事官於附近各處地方。關於俄民事件均前往辦理之責。按照一千八百六十年即咸豐十年北京條約第五第六兩條應給予可蓋房屋、牧放牲畜、設立墳塋等地。嘉峪關及吐魯番亦一律照辦。領事官公署未經起蓋之先地方官幫同租覓暫住房屋。俄國領事官在蒙古地方及天山南北兩路往來行路寄發信函。按照天津條約第十一條北京條約第十二條可由台站行走。俄國領事官以此事相託中國官即妥為照料。吐魯番非通商口岸而設立領事各海口及十八省東三省內地不得援以為例。

第十一條

俄國領事官駐中國遇有公事按事體之關係案件之緊要及應如何作速辦理之處或與本城地方官或與地方大憲往來均用公文彼此往來會晤均以友邦官員之禮相待兩國人民在中國貿易等事致生事端應由領事官與地方官公同查辦。如因貿易事務致起爭端聽其自行擇人從中調處如不能調處完結再由兩國官員會同查辦兩國人民為預定貨物運載貨物租賃鋪房等事所立字據可以呈報領事館及地方官處應與畫押蓋印為憑遇有不按字據辦理事情領事官及地方官設法務令依照字據辦理。

第十二條

俄國人民准在中國蒙古地方貿易照舊不納稅其蒙古各處及各盟設官與未設官之處均准貿易亦照舊不納稅並准俄民在伊犁塔爾巴哈台喀什噶爾烏魯木齊及關外之天山南北兩路各城貿易暫不納稅俟將來商務興旺由兩國議定稅

則即將免稅之例廢棄以上所載中國各處准俄民出入販運各國貨物其買賣貨物或用現錢或以貨相易俱可並准俄民以各種貨物抵張

第十三條

俄國應設領事官各處及張家口准俄民建造舖房行棧或在自置地方或照一千八百五十一年即咸豐元年所定伊犁塔爾巴哈台通商章程第十三條辦法由地方官給地蓋房亦可張家口無領事而准俄民建造舖房行棧他處內地不得援以為例

第十四條

俄商自俄國販貨由陸路運入中國內地者可照舊經過張家口通州前赴天津或由天津運往別口及中國內地並准在

上各處銷售俄商在以上各城各口及內地置買賣物運送回國者亦由此路行走並准俄商前往肅州即嘉峪關貿易貨幫至關而止應得利益照天津一律辦理

第十五條

俄國人民在中國內地及關外地方陸路通商應照此約所附章程辦理此約所載通商各條及所附陸路通商章程自換約之日起於十年後可以商議酌改如十年限滿前六個月未請商改應仍照行十年俄國人民在中國沿道通商應照各國總例辦理如將來總例有應修改之處由兩國商議酌定

第十六條

將來俄國陸路通商與旺如出入中國貨物必須月定稅則較現在稅則更為合宜者應由兩國商定凡進口出口之稅均按

值百抽五之例定擬於未定稅則以前應將現照上等茶納稅之各種下等茶出口之稅先行分別酌減至各種茶稅應由中國總理衙門會同俄國駐京大臣自換約後一年內會商酌定

第十七條

一千八百六十年即咸豐十年在北京所定條約第十條至今講解各異應將此條聲明其所載追還牲畜之意作為凡有牲畜被入偷盜誘取一經獲犯應將牲畜追還如無原物作價向該犯追償倘該犯無力賠還地方官不能代賠兩國邊界官應各按本國之例將盜取牲畜之犯嚴行究治並設法將自行越界及盜取之牲畜追還其自行越界及被盜之牲畜踪跡可以示知邊界兵並附近鄉長

第十八條

按照一千八百五十八年五月十六日即咸豐八年在愛輝所定條約上應准兩國人民在黑龍江松花江烏蘇里河行船並與沿江帶地方居民貿易上現在復為申明至如何照辦之處應由兩國再行商定

第十九條

兩國從前所定條約未經此約更改之款應仍舊照行

第二十條

此約奉兩國御筆批准後各將此條約通行曉諭各處地方遵照將來換約應在森比德堡自畫押之日起以六個月為期兩國全權大臣議定此約備漢文俄文法文約本兩分畫押蓋印為憑三國文字校對無訛遇有講論以法文為證

光緒七年議定專條

按照中俄兩國全權大臣現在所定條約第六條所載中國將俄兵代收代守伊犁兵費及俄民各案補卹之款共銀盧布九百萬圓歸還俄國自換約之日起二年歸完兩國全權大臣議將此款交納次序辦法商定如左

以上銀盧布九百萬圓合英金磅一百四十三萬一千六百六十四圓零二希令勻作六次除兌至倫敦匯費毋庸由中國付給外按每次中國淨交英金磅二十三萬八千六百一十圓零十三希令八本士付與倫敦城內布拉得別林格銀號收領作為每四箇月交納一次第一次自換約後四箇月交納末一次在換約後二年期滿交納此專條應與職明現在所定條約無異

異是以兩國全權大臣畫押蓋印為憑

第一條

兩國邊界百里之內，准中俄兩國人民，任便貿易，均不納稅。其如何稽查貿易之處，任憑兩國各按本國邊界限制辦理。

第二條

俄國商民，前往蒙古及天山南北兩路貿易者，祇能由章程所附清單內，指明卡倫過界。該商應有本國官所發中俄兩國文字，並譯出蒙古文或回文執照。漢文照內，可用蒙古字或回文字，註明商人姓名、隨人姓名、貨色、包件、牲畜數目。若干。此照應於入中國地界時，在附近邊界中國卡倫呈驗。該處查明後，卡倫官蓋用戳記為憑。其無執照商民過界者，任憑中國官扣留。

交附近俄國邊界官或領事官，從嚴罰辦。遇有遺失執照，貨主應報明附近領事官，以便請領新照。一面報明地方官，暫給憑據。准其執此前行。其運到蒙古及天山南北路各處之貨，有未經銷售者，准其運往天津及肅州。或在該關口銷售，或運往內地。其徵收稅餉，發給運貨執照，查驗放行等事，均照以下章程辦理。

第三條

俄商由恰克圖、尼布楚運貨前往天津，應由張家口、東壩、通州行走。其由俄國邊界運貨過科布多歸化城，前往天津者，亦由此路行走。該商應有俄官所發運貨執照，並由中國該管官蓋印。照內用中俄兩國文字，註明商人姓名、貨色、包件數目。任憑沿途各關口中國官員迅速點數查看。驗照蓋戳放行。查驗之

時如有拆動之件仍由該關口加封并將拆動件數於照內註明以憑查駁該關查驗不得過一箇時辰其照限六個月在天津關繳銷如該商以為限期不足應先報明該處官員備有商人遺失執照應報明原給執照之官並呈明日期號頭請領新照註明補給字樣一面至就近關口報明查驗相符暫給憑據准其運貨前行如查該商所報貨數不符查該商係有隱匿沿途私賣貨物希圖逃稅情事上應照第八條章程罰辦

第四條

俄商由俄國運來貨物路經張家口任聽將貨酌留若干於口銷售限五日內在該關口報明交納進口正稅後由中國官發給賣貨准單方准銷售

第五條

俄商由俄國運來貨物自陸路至天津者應納進口稅餉照稅則所載正稅三分况一交納其由俄國運來貨物至肅州者所有完納稅餉等事應照天津一律辦理

第六條

如在張家口酌留之貨已在該口納稅而貨物有未經銷售者准該商運赴通州或天津銷售不再納稅並將下在張家口多交之一分補還俄商即於該口所發執照內註明俄商在張家口酌留之貨已在該口納稅者如欲運入內地應照各國總例再交一子稅之正稅該口發給運貨執照應於沿途所過各關卡呈驗如無執照者則逢關納稅遇卡押釐

第七條

俄商由俄國運來貨物至肅州即欲運入內地者應照章程

第九條 天津運貨入內地之例一律辦理

俄商由俄國運來貨物至天津除報明酌留張家口之貨外如查有原貨抽換或數目短少與原照不符即將所報查驗之貨上全行入官但沿途實係包箱損壞必應改裝者該商行抵就近關口報明如查驗原貨相符即於執照內註明方可免其贖罰倘有沿途私售一經查出其貨全行入官如僅繞越捷徑不接第三條所載之路行走以避沿途關卡查驗一經查出罰令完一正稅如係車脚運夫作弊有違以上章程貨主實不知情該關應下體察情形分別罰辦惟此辦法係專指俄國陸路通商經過各處而言上各海口及各省內地遇有以上情事不得援以為例其罰令入官之貨如商人願將原貨作價交官准其與中國

官按照原貨估價交官亦可

第九條

俄商自俄國由陸路運至天津之貨如由海道運往議定通商各口應按照稅則在天津關補交原免三分之一稅銀俟抵他口不再納稅如由天津及他口運入內地應按照稅則交一子稅之即正稅照各國總例辦理

第十條

俄商在天津販買土貨回國應由第三條所載張家口等處之路行走俄商運貨出口應交出口正稅若在天津販買復進口土貨及在他口販買土貨經津回國如在他口全稅交完有單可憑至此不再重徵該商交稅後在一年限內出口回國將下在天津所交復進口半稅仍行給還俄商運貨回國領事官發給

兩國文字執照註明商人姓名貨色包件數目若干由該關蓋印該商務須貨照相隨以憑沿途各關口查驗放行其繳銷執照限期並遇有遺失執照等事均照第三條章程辦理該商應照第三條所載之行走沿途不得銷售如違此章即照第八條所定章程罰辦沿途各關卡查驗貨物應照第三條章程辦理至俄商由肅州^{如嘉峪關}販運該處所買土貨及在內地所買土貨運往該處回國者所有完納稅餉等事均照天津一律辦理

第十一條

俄商在通州販買土貨由陸路出口回國應照稅則完納出口正稅其在張家口販賣土貨出口回國應在該口納一子稅^{即半稅之}俄商由內地販買土貨運往通州張家口回國者照各國在內地買土貨總例應再交一子稅由各該關口收稅發給運

物執照其在通州買土貨回國者應在東壩報明收稅發給執照沿途不得銷售應於執照內載明其由以上各處運貨出口發照驗貨等事應照第三條所載章程辦理

第十二條

俄商在天津通州張家口嘉峪關販運別國洋貨由陸路出口回國如該貨已交正稅子稅有單可憑不再重徵如祇交過正稅未交子稅該商應按照稅則在該關補交子稅

第十三條

俄商販運貨物進口出口應照各國稅則及同治元年所定俄國續則納稅如各國稅則及續則均未備載再照值百抽五例納稅

第十四條

凡進口出口免稅之物如金銀外國各銀錢各種麪砂穀米麪餅熟肉熟菜牛奶酥牛油密饒外國衣服金銀首飾攪銀器香水胰碱炭柴薪外國蠟燭外國煙絲烟葉外國酒家用雜物船用雜物行李紙張筆墨毯氈鉄刀利器外國自用藥料玻璃器皿以上各物由陸路進口出口皆准免稅惟由章程內載各城及各海口運往內地者除金銀外國銀錢行李三項仍毋庸議外其餘各物皆按每值百兩完納稅銀二兩五錢

凡違禁之物如火藥大小彈子礮位大小鳥鎗并一切軍器等類及內地食鹽洋藥均屬違禁不准販運進口出口如違此例即將所運違禁之物全罰入官俄國人民前往中國者每人准帶鳥鎗或手槍一桿護身填子入執照又硝磺白鉛須奉中國官發給准單方准俄商運進口內如華商特奉准買明文方准銷

售中國米銅錢不准販運出口外國米穀及各種糧食皆准販運進口一概免稅

第十六條

俄商不准下包庇華商貨物運往各口

第十七條

凡有嚴防偷漏諸法上任憑中國官隨時設法辦理

光緒七年卡倫單

一	胡柏里志呼
二	則林圖
三	毛葛子格
四	烏梁圖
五	多羅洛克
六	霍林納拉蘇
七	呼拉查
八	巴揚達
九	阿深嘎

中國卡倫

一	斯他羅粗魯海圖斯基
二	查罕額羅業甫斯基
三	克留車甫斯基
四	庫魯蘇他業甫斯基
五	查蘇車業甫斯基
六	杜魯勒古業甫斯基
七	托克托爾斯基
八	
九	阿深金斯基

俄國卡倫

十	鴻寧
十一	烏阿勒嘎
十二	庫達拉
十三	恰克圖
十四	哈拉呼志爾
十五	治爾格台
十六	鄂爾托霍
十七	伊勒克池拉穆
十八	烏尤勒特
十九	貝勒特斯
二十	賽郭鄂拉
二十一	金吉里克

十	們森斯基
十一	沙拉郭勒斯基
十二	庫達林斯基
十三	恰克圖
十四	博齊斯基
十五	熱勒都林斯基
十六	哈拉采斯基
十七	哈木聶斯基
十八	克留車甫斯基
十九	歡金斯基
二十	額庚斯基
二十一	

- 二十二 攸斯提特
- 二十三 蘇鄂克
- 二十四 查罕鄂博自此兩國同名
- 二十五 布爾噶蘇台
- 二十六 哈巴爾烏蘇
- 二十七 巴克圖
- 二十八 哈普他蓋
- 二十九 闊克蘇山口
- 三十 霍爾果斯
- 三十一 別疊里山口
- 三十二 帖列克第山口
- 三十三 圖魯噶爾特山

二十二

二十三

三十四 蘇約克山口

三十五 伊爾克什唐

單內所開過界各卡可俟中國邊界官及俄國領事官體察情形報明後由中國總理衙門會同俄國駐京大臣商議酌改將查明可裁之處分別冊或以便商之處酌量更易亦可

同治三年九月初七日勘辦西北界大臣明誼等會同俄國大臣雜哈勞在塔城議定記約十條

兩國大臣遵照京城議定和約在塔爾巴哈台會同將自沙濱達巴哈起至浩罕邊界之葱嶺止兩國中間應分界址順山嶺大河及現在中國常住卡倫議定交界會畫地圖內以紅色線道分為兩國交界今將議定界址地名並擬議章程開列於後

第一條

自沙濱達巴哈界牌起先往西後往南順薩彥山嶺至唐努鄂拉達巴哈西邊末處轉往西南順賽留格木山嶺至奎屯鄂拉即往西行順大阿勒台山嶺至齋桑淖爾北面之海留圖兩河中間之山轉往西南順此山直至齋桑淖爾北邊之察奇勒莫斯鄂拉即轉往東南沿淖爾順喀喇額爾齊斯河岸至瑪呢圖

噶圖勒幹卡倫為界此間分別兩國交界即以水流為憑向東南向西南水流之處為中國地向西向北水流之處為俄國地

第二條

自瑪呢圖噶圖勒幹卡倫起往東南行至賽哩鄂拉先往西南後往西行順塔爾巴哈台山嶺至哈木爾達巴哈即轉往西南順庫木爾齊哈喇布拉克巴克圖葦塘子瑪呢圖沙喇布拉克察汗托霍依額爾格圖巴爾魯克莫多巴爾魯克等處卡倫之路至巴爾魯克阿拉套兩山嶺中間由平地行即在哈布塔蓋阿嚕沁達蘭兩卡倫中間擇山坡定界自此至阿勒坦特布什山嶺東邊末處為界此間分別兩國交界即以水流為憑向東南向西南水流之所為中國地向西向北水流之所為俄國地

第三條

自阿勒坦特布什山嶺東邊末所起，依阿拉套大嶺往西順阿勒坦特布什索達巴哈庫克托木罕喀爾察蓋等山頂，行向北水流之所為俄國地，向南水流之所為中國地，至向東水流之薩爾巴克圖河向西流水之庫克鄂羅木河向南流水之奎屯河源之匡果羅鄂博山，即轉往南向西流水之庫克鄂羅木等河之所為俄國地，向東流水之薩爾巴克圖等河之處為中國地，自此由奎屯河西邊之奎塔斯山頂行至圖爾根河水從山內向南流出之所，即順圖爾根河依博羅胡吉爾奎屯齊幹霍爾果斯等處，卡倫至伊犁河之齊欽卡倫過伊犁河往西南行至春濟卡倫轉往東南至特穆爾里克源轉東由特穆爾里克山頂行圍繞哈薩克布魯特游牧之地，至格根河源，即轉往西南格根等向西流水之所為俄國地，溫都布拉克等

向東流水之所為中國地，自此往西南由喀喇套山頂行至畢爾巴什山，即順向南流水之達喇圖河至特克斯河過特克斯河順那林哈勒哈河靠天山嶺為界，自此往西南分晰回子部落布魯特部落住牧之所，由特穆爾圖渾爾南邊之罕騰格爾薩瓦巴齊貢古魯克喀克善等山統曰天山之頂，行至葱嶺靠浩罕界為界。

第四條

現將邊界順山嶺大河及常住卡倫議定後其邊界以外分入俄國之地原有中國烏里雅蘇台科布多所屬大阿勒台等山嶺迤北舊住之烏克々等，卡倫塔爾巴哈台所屬塔爾巴哈台山嶺迤北舊住之鄂倫布拉克等，卡倫及阿拉套山迤北舊住之胡蘇圖阿魯沁達蘭，卡倫伊犁所屬舊住之匡果羅鄂等，卡

倫建立界牌鄂博以前仍聽中國在彼住守統俟明年兩國立界大臣會同建立界牌鄂博時何所將界牌鄂博立畢即將何所應向內挪移卡倫限一月內挪移

第五條

今將邊界議定永固兩國和好以免日後兩國為現定邊界附近地方住牧人丁相爭之處即以此次換約文到之日為准該人丁向在何處住牧者仍應留於何處住牧俾伊等安居故土各守舊業所以地面分在何國其人丁即隨地歸為何國管轄嗣後倘在下由原住地方越往他所者即行撤回免致混亂

第六條

自現在議定邊界換約之日起過二百四十日即為兩國立界大臣訂准日期俄國兩起立界大臣均赴阿魯沁達蘭喀布塔

蓋兩卡中間會齊一起會同伊犁立界大臣往西南按照議定界址建立界牌鄂博一起會同塔爾巴哈台立界大臣往東北按照議定界址建立界牌鄂博行至瑪呢圖噶圖勒幹卡倫會同科布多立界大臣按照議定界址建立界牌鄂博行至索果克卡倫會同烏里雅蘇台立界大臣按照議定界址建立界牌鄂博至沙賓達巴哈止如遇大山以山梁劃界遇大河以河岸劃界如遇橫山橫河俱以新立界牌鄂博劃界至建立界牌鄂博時總以各界址處所水流之方向作為立界之憑擇其地方形勢建立如有大嶺行人不能越往實難堆立之處即以水流及山嶺為界其平曠之區兩國堆立界牌鄂博時中間空出二十丈作為公中之地所立界牌鄂博以左其山河所產一切物件均屬中國所立界牌鄂博以右其山河所產一切物件均屬

俄羅斯國

第七條

明年兩國立界大臣建立界牌鄂博畢再將堆立界牌鄂博共若干處及均在何處堆立地名作記互換為憑

第八條

今將兩國應分界址議定建立界牌鄂博後倘有河源係在中國而流注於俄國者中國不得改截其流注之故道倘有河源係在俄國而流注於中國者俄國亦不得改截其流注之故道

第九條

從前僅止庫倫辦事大臣與恰克圖固畢爾那托爾及伊犁將軍塔爾巴哈台參贊大臣與西悉畢爾總督往來行文自今勘定邊界之後烏里雅蘇台科布多二處遇有會同俄國查辦事

件應下擬增添由烏里雅蘇台將軍科布多參贊大臣與托木色米珀拉特二省固畢爾那托爾往來行文辦理其所行文件或用清字或用蒙古字俱可

第十條

塔爾巴哈台所屬巴克圖卡倫迤西小水地方舊有種地納糧民莊五處該處地面按今定議界址雖已分在俄國惟該民人所種田地斷難遽令遷移應於立界後限十年內令伊等陸續內遷今經兩國大臣會同議定將一切分定界址繪圖四分圖內分定界址地名用俄羅斯字滿洲字合璧註寫兩國勘界大臣鈐印畫押並作此記約用俄羅斯字滿洲字各書寫四分兩國勘界大臣鈐印畫押一併互換兩國分界大臣各存圖誌一分記約各一分以便查辨外其餘圖誌二分合璧記約二分由

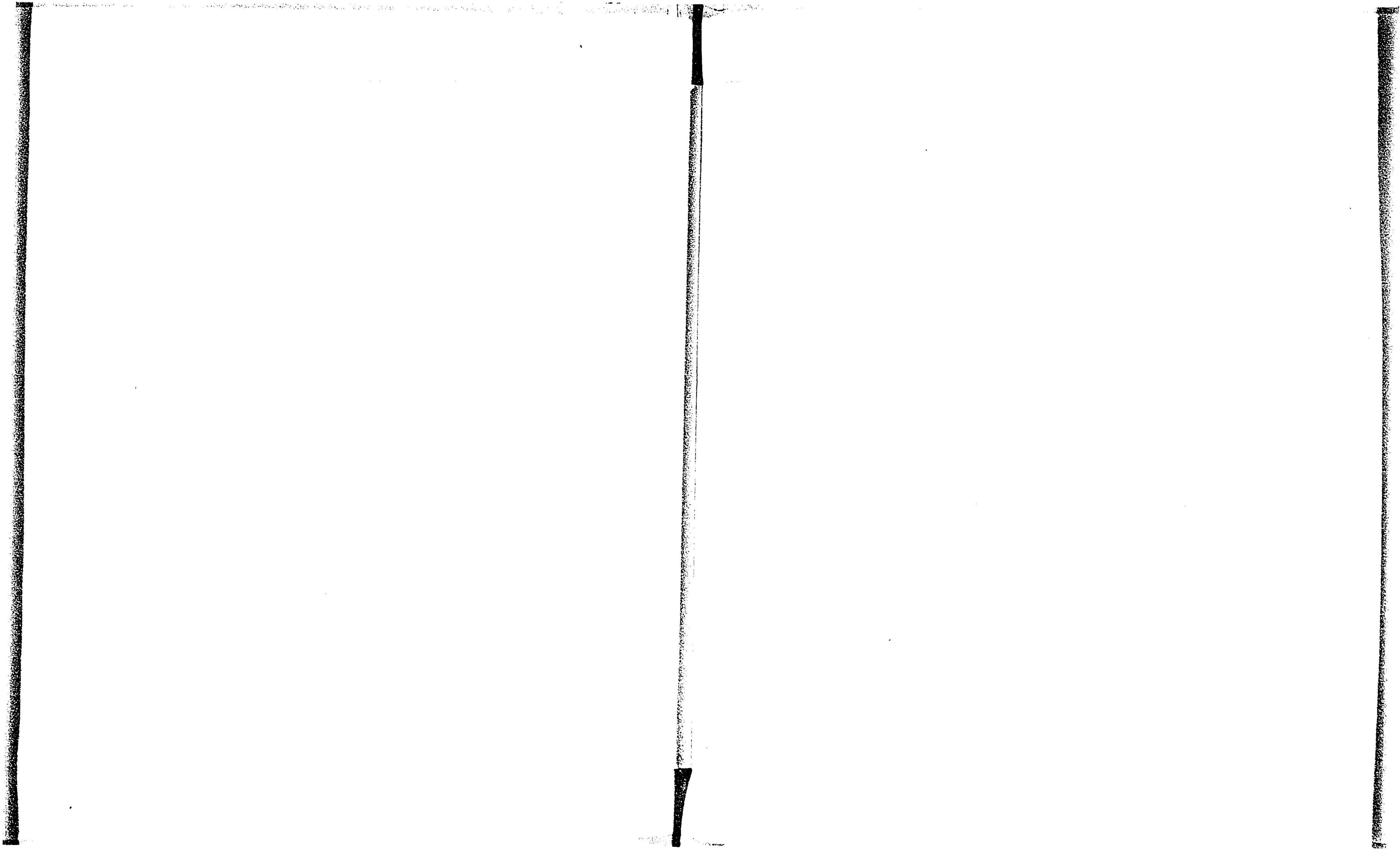
兩國分界大臣自行呈送各本國總理各國事務衙門各一分以備補續京城議定條約爲此互換記約可也

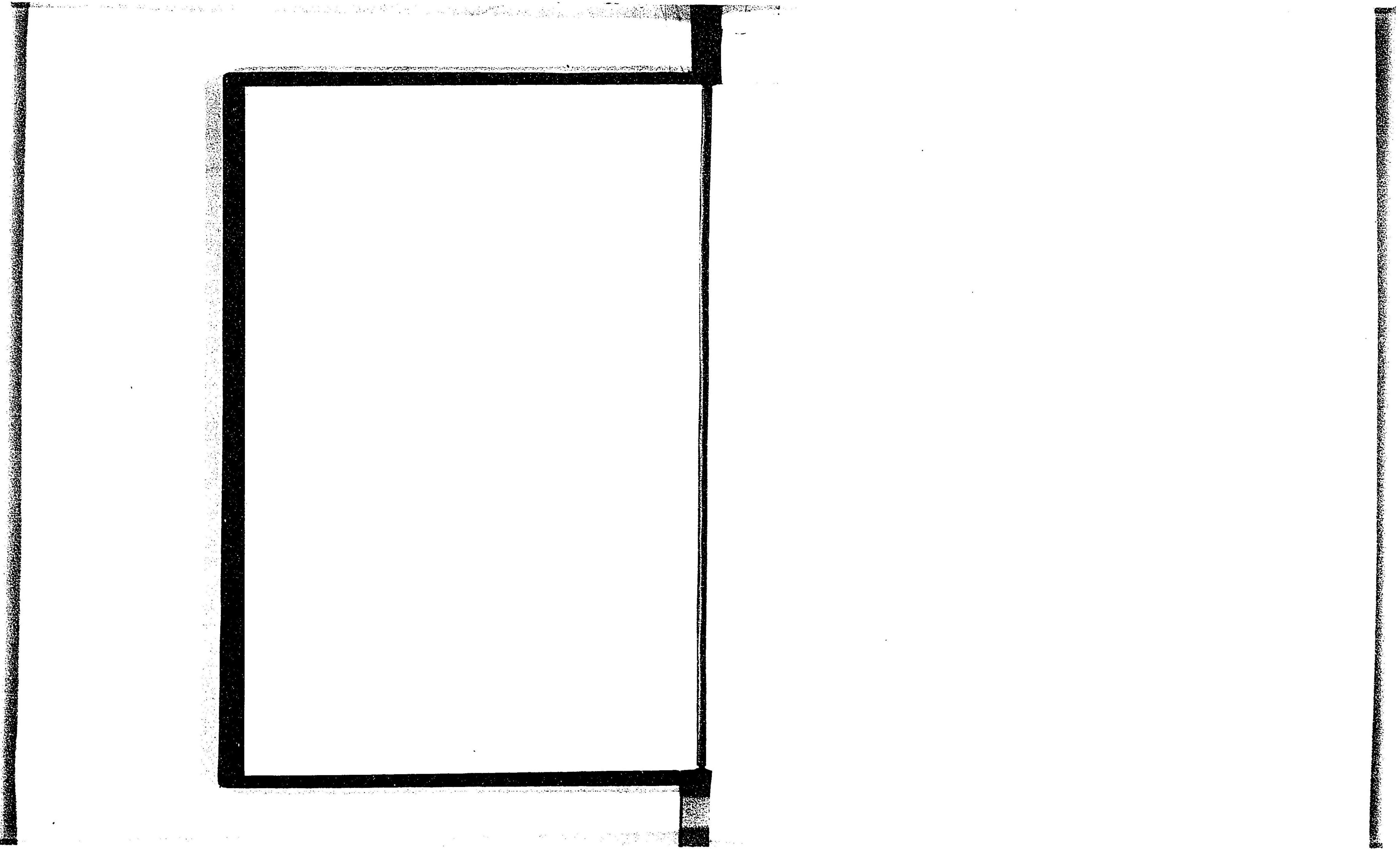
引用書目

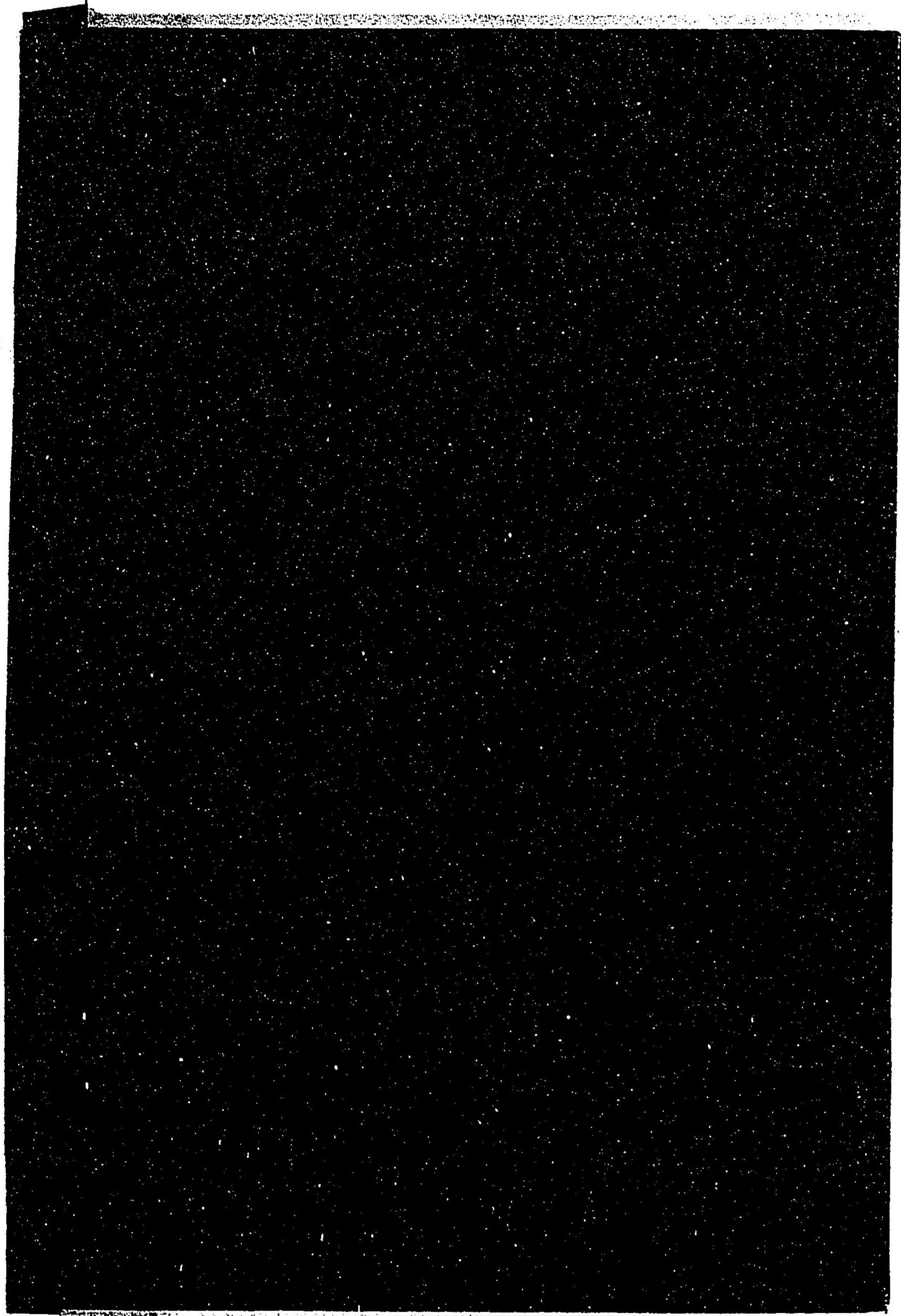
書名	著述者	出版年號
一トルキスタン地方 軍務統計ノ試案	コステニenko	千八百八十年
一中アジヤ ロシヤ其威徳ヲ中アジヤニ展ム	右同	千八百七十一年
一年記 トルキスタン地方統計ノ材料	マーエフ	千八百七十三年
一トルキスタン紀行	セーウエルツヨフ	千八百七十三年
一中アジヤ境界 軍務一覽	ウニコニコロフ	千八百七十三年
一ロシヤ字彙 節用集	ペリヨソフ	千八百七十八年
一トルキスタン曆	ビヤンコロフ	千八百七十九年
一中アジヤ紀行	ワムベリ	千八百六十五年
一中アジヤ論ノ概略	ロマンノフスキー	千八百六十八年

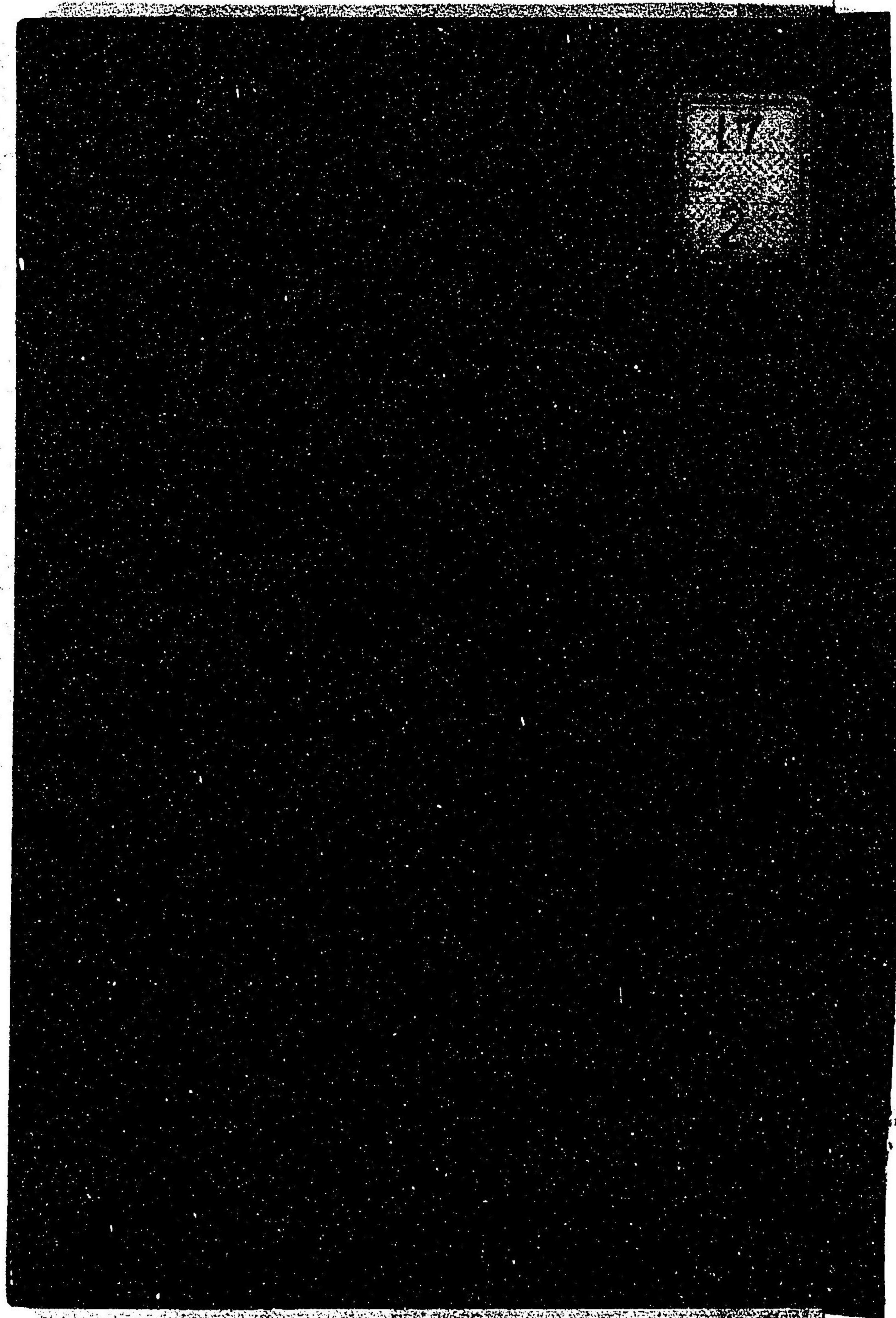
外2L36

一ロシヤ及イギリス	市地ノ競争	アレシナエ、フ	千八百七十六年
一ロシヤ、及イギリス、中アジヤ、ニ於ケル	マルテンス		千八百七十九年
一ロシヤ及清國ノ争論	右全		千八百八十年
一東トルキスタン地誌	リツテル		千八百六十九年
一東トルキスタン誌補	グリゼーリニ、フ		千八百七十三年
一カシガリヤ誌	クロバツキン		千八百七十九年
一西域聞見録	椿園		乾隆四十二年
一三州輯略	太庵和英		嘉慶十年
一西陲要略	祁韻士		全 十二年
一聖武記	魏源		道光二十二年









026772-000-1

17-2

中亞細亞紀事

西 徳二郎 / 編

M19

ADD-0473

